

『まちづくりにおける歴史的視点』

学生番号 1730022021

経営学部公共経営学科

4年19組48番

丸山 達郎

目次

はじめに (導入)

第一章 まちづくりの視点

第一節 創造性 (自分の住む街、渋谷の行政方針)

第二節 連続性 (歴史的視点)

第三節 創造性と連続性 (第一、第二節の補足として)

第二章 渋谷地域の歴史

第一節 史跡・遺跡とその背景 (近世まで)

第二節 近現代のまちの面影 (明治以降)

第三章 渋谷のまちづくりと地域の歴史

第四章 (終章) 自分の住む地域を見つめ直して

おわりに・・・

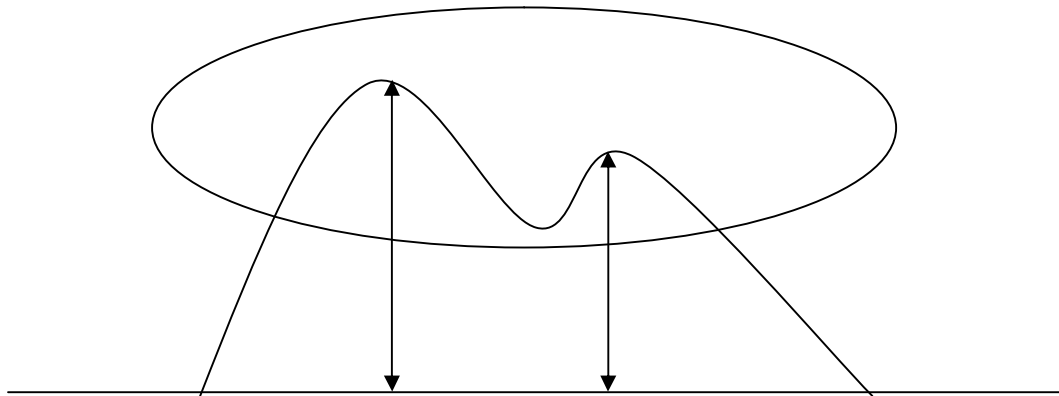
はじめに (導入)

筆者がこれまで取り組んできたテーマは「まちづくり」についてである。全国のいくつかの地域で行われてきているまちづくりの活動について勉強するうちに、自身の住んでいる地域のまちづくりは、どのようになっているのだろうかという疑問が生まれた。

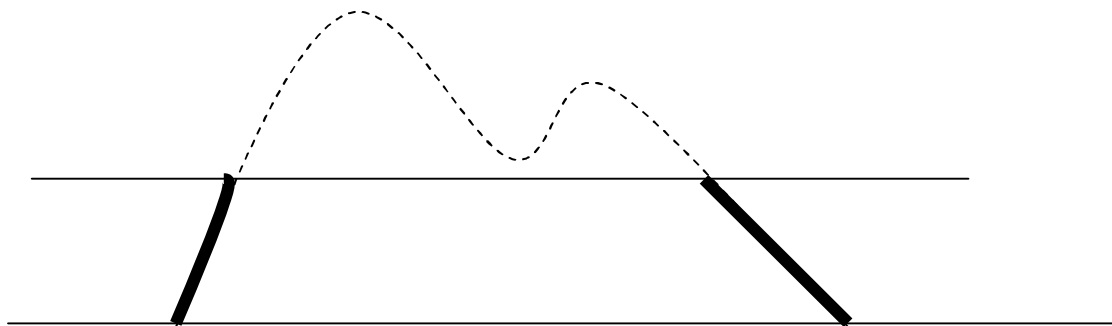
遠い昔、地域同士のつながりが活発ではなかった頃、違う地域というのは、まさに違う「くに」であった。今でも「くにはどこだい」なんていう言葉があるように、その地域性というのは言葉から習慣、考え方にまで影響してきた。しかし現在は、地域間の格差を無くす、日本全土を均一に工業的、経済的、合理的な開発、発展をさせるという戦後の高度経済成長期の国策が達成されたことによって、日本全国の都市(例えば都市部を例に上げると)の形は、規模の違いはあるにしてもそのほとんどが画一的なものになっている。どこの都市の駅に降り立ったとしても、その風景はみな同じような形のビルが立ち並ぶ一様なものなのである。さらには、東京のような経済的発展こそが、それぞれの都市の目指すところであるという価値観に支配されていた。「まちづくりの実践」の著者、田村明氏によれば、『私自身の経験でも、工場や自動車の排ガスで大気が汚染し、住民の健康を損なうので、大企業にたいし公害規制の交渉をしたとき、「日本の経済のために我慢しろ」と言われた。また都市を整った魅力あるものにするアーバンデザインを行おうとしたとき、「都市を美しく个性的にしようとは、とんでもない」と国に言われた。至るところで、がけを切り崩す乱開発が行われ、これを抑えようとすると、国や開発業者から「財産権の侵害だ」「法令に違反することは止めろ」と言われた。』ということであり、2～30年前はこうした状況であった。

ところが、今後の国の方針は国土開発を各々地域ごとに任せる方向にむかっていく。地方分権、権限、財源移譲も手伝ってその動きは加速されていくことであろう。つまりここに来て、再度地域に見合った方向、方法で、国土開発が行われていく基盤が整備されたのである。社会全体の価値基準に合わせても、その大方はこの方向で統一されていくのではないだろうか。まちには個性を持たせたほうが良いという価値観である。どこの自治体でも、自分たちの地域の財産は何であるのかについて議論がなされ、盛んに他との差別化を図っている、その財産というのも、それがあつて経済規模が大きくなるとか、～の企業を中心に誘致したとか、そうした基準ではない。古い町並みであつたり、りんごの並木であつたり、山々に囲まれた風景であつたり、何百年も受け継がれてきた水路であつたり、物でなくても芸能、音楽、であつたりと様々であり、経済的な価値基準だけでは、測れないものである。

こうした流れで再びまちが作られようとしている中、今自分の住む地域(といっても規模は様々であるが)について、地域の財産について、(地名)を(地名)足らしめているものは何なのかについて、目を向けるには、今はよい機会であると思うのである。そして、経済的な価値観だけでは測れない、地域の財産に価値を見出し、まちづくりに反映させていくべきであると思うのである。次にそうしたものを発見するための手段であるが、



ここで街を上のような山にたとえてみる。地域の財産や特色というのは、山の頂が二つ連なっている様や、山の高さなどで表されているとしよう。



の直線が戦後の画一化された都市計画によってつくられたまちを表している。こうした街がつけられたあとには、にあったような山の頂の連なりや、にあるような高さといった地域の特徴や財産は失われ()、あるいは埋もれたり()してしまう。

そこで、まちを歴史という面から見ることによって、埋もれてしまったの部分を見たり、そこから失われてしまった部分を想像・構築したりすることが出来るのではないだろうかというのが筆者の考えである。

つまり「まちづくりにおける歴史的視点」というのは、個性的な地域にあったまちづくりをする上で、そこに生かされるべき失われていたり埋もれていたりするまちの特徴や財産という材料を見つける手段として「まちを歴史という面から見る」という視点・行為が必要であるということなのである。

というわけで、そうした事の事例として、自分の住んである地域(渋谷区)について、渋谷を渋谷足らしめているものは何なのかということを通して示していきたい。

ここで自分が住んでいる地域について、ちょっと考えてもらいたい。いくつ財産や特徴が浮かんだであろう。ほとんどの人があまり浮かばないであろう。そんな読者の方にも是非この論文を読み終わった後に自分の地域について調べてもらいたいのである。なぜならそのことが明日のまちづくりを支える力になることを筆者は信じてやまないからである。

第一章 まちづくりの視点

第一節 創造性（自分の住む街、渋谷の方針）

筆者の住む地域のまちづくりについて、現在～今後の方向性を調べてみた。渋谷区の将来都市像を実現するための基本計画、都市計画マスタープランというものが策定されていた。まず、渋谷区の将来都市像というものが「創意あふれる生活文化都市 渋谷」とされ、こ

ころと身体の健康の保持・増進を図る目的があるようである。また応えるべき課題として、

定住できるまちとしての渋谷区の創造

副都心を有するまちとしての渋谷区の創造

二つのまちを調和させるしくみの形成

の三つを掲げている。まず、 に上げられている、定住できるまちとしての渋谷区の創造であるが、もともと、そして今も区の大部分は住宅地である（イメージとしてはそういう風には思われなくてもいいが）ので今更何のことを言っているのかよく分からない。つまりそれほど大きな計画の実行は無く、それほど税金も使われないであろう。しかしこれが に上げられている副都心渋谷ということを含めて考えると、どういったことなのかが見えてくるのである。それは少し置いておいて、都市計画マスタープランについてもう少し話をすると、次に分野別まちづくりの方針というものがある。1～8番まであり、それらすべての前提として「環境と調和・共生するまちづくり」である。そして例えば

2番、市街地整備 ゆとりある生活空間の整備

3番、交通体系整備 安全で快適な交通環境整備

この二つに関して、これはすべてではないが、大きくは渋谷駅周辺についていっているように思われる。この後に出てくる「渋谷駅周辺整備ガイドプラン21」というところでも説明するが、渋谷駅は現在各線が入り組んでいて非常に分かりにくい状況であり、乗り継ぎも不便であることが問題となっている。加えて駅周辺に関してもその用途が見直され、東急をはじめとして再開発の流れとなっている。また都市型住宅の構想もその再開発の流れには入っていて、それも視野に入れた市街地の整備となってくるであろう。その他にも、

5番、みどりと水・潤いのあるまちづくり 潤い、安らぎのある空間づくり

7番、都市景観形成 魅力あるまちなみづくり

とあるが、どちらも特定の地域に止まるものであると、将来都市構造図をみるとわかる。「環境と調和・共生するまちづくり」ということを掲げている割には、地域ごとに明確に分けられてしまっていることがわかる。そしてその次には、まさに地域別構想というものがあり、地域別まちづくりの方針として、「渋谷区を6つの区域に区分し、それぞれの地域ごとにまちづくりの目標・方向性を示します。今後行われていく、個別・具体のまちづくりに際して、指針としての役割を果たすものです。各地域ごとに歴史・特色と現状、まちづく

りの視点と方向、まちづくりの方針図を示しています。」とある。本町・笹塚地域は「安心して快適に住み続けられるまち」初台・西原・上原地域は「みどりと潤いのある環境を保全し快適に暮らせるまち」を地域の将来像としてあげているが、実際は現在すでにこの通りのまちであるといっても過言ではない状態なのである。もともとこのようなまちなのである。つまりこの二つの地域は現状維持ということで片付けられているのである。他の4つの地域に関しても「地域の将来像」と「現状」がほぼ一致している。さて、自身と関連しているところでは、渋谷駅周辺「生活文化を発信する活力ある副都心」恵比寿駅周辺「生活をより豊かにするにぎわいのまち」となっている。これだと現状維持、または現状に沿った形で更に開発することが可能であり、つまりはこの都市計画マスタープランの主眼がどうもこうした駅を中心とした、その周辺の開発にあるのではないかと、などと思ってしまう。少なくとも今現在着目しているのは、渋谷駅周辺であるだろう。

そこで話を 副都心を有するまちとしての渋谷区の創造、に戻すが、これに関しては、上記のように主眼が渋谷駅周辺にあることもあって、別途「渋谷駅周辺整備ガイドプラン21」というものが存在する。これに関しての力の入れようはなかなかのもので、マスタープランの倍のページ数という詳しいものになっている。これによると、まず、渋谷が目指すまちのコンセプトとして『誰もが住みたい街 働きたい街 楽しみたい街 それができる「人が主役の街・渋谷」』ということである。これに加えて地区別将来像には、4つのゾーンを設定している。「住（住居）を中心とするゾーン」「職（業務）を中心とするゾーン」「楽（商業・文化・教育）を中心とするゾーン」「住」「職」「楽」の混合ゾーン』といった4つである。この二つのことを考え合わせると、出てくるキーワードは「職住近接」というものであり、これを目指すことが基本のコンセプトであると考えられる。職住近接というのは、高度成長、バブルを経て形成された、郊外のベッドタウンに住んで、都心の職場に何時間もかけて通勤するというスタイルではなく、居住地と職場を近いところに立地させることで、通勤往復の時間と労力と費用を他のところに使おうというものである。また、この考え方を具現化させることで、自分の住む地域のコミュニティとのつながりを深めたり、家族や趣味に時間などを割くことができゆとりあるライフスタイル、彩り豊かなライフスタイルを実現することができるのである、という考え方である。しかしながらこれは理想に近いものがあって、議論からは用地に対する費用や現実的な立地条件といったものが欠落しているのである。つまり居住地と職場を隣接させるだけの土地、そしてそれが一つの地域を形成するような大きな土地を誰が費用を出して建設するのか、加えて企業の経済活動というのは、例えしっかりとした本拠地があったとしても、その場所だけで完結することはできないのである。他の地域のアクセスも当然良くなくてはならない。それにはやはりある程度都心である必要性が出てくる。しかし都心であると、前者に上げた問題へ必要な資金が跳ね上がる。というように到底現実化は難しいのである。理論としては、確かに賛成であった。しかし職住近接を実現した六本木ヒルズなどを考えると、賛成もあまり出来ないかもしれない。つまりは金のある人間しかすむことができないのであ

る。金のある人間が住み、力のある会社を運営し、文化の中心地としての街に花を添えるということである。多くの人間がこの考え方を享受できるわけではないのである。渋谷駅周辺がそれを目指せば、そういう同じような街が出来上がると思う。そして今よりも更に発展し、今とは違う装いも持つ街になるであろう。渋谷駅そのものについてはどうであろう。先にも書いたが、渋谷駅は二つのバスターミナルとJR山手線、東急、京王、東京メトロなど様々な路線が集まっていて、それぞれのアクセスもあまり良くない。特に銀座線、山手線のホームは相対式ホームで分かりにくさや不便さがある。(山手線の場合、反対方面の電車に乗るには、一度階段を使って反対側ホームまで移動しなくてはならないのである。) 加えて平成19年度には、営団地下鉄13号線が開通し、平成24年度には東急東横線の地下化と13号線との相互直通運転化など、ターミナルとしての役割はこれからも広がっていく。そのような流れの中、一度このごちゃごちゃした状態をわかりやすくしようという計画、(渋谷駅を改良する)が持ち上がっている。個々の問題からそれに対する対応と、ぶつ切りになってプランの中には書かれているが、それを繋げて、では一体どのようになるのか、ということを導き出すと、どうも今ある西口広場、駅、東口広場、東急文化会館跡地などまでの土地を使って地上も地下も何層にも重なる巨大なプロムナードを建設する予定らしい。このことに関してはステージ1~3を設定し、具体的な計画となっている。

つまりかなり本気でやろうとしているようだ。長々と書いてきたが、ここで言いたいことは、つまりどうも区が力を入れてまちづくりをしようと考えているのは、渋谷駅及び渋谷駅周辺の改革のようである。特に問題提起にはなっていないような気がするが、そうではない。区の玄関をきれいにし、魅力を増すことには特に反対するわけではないが、この利益の大半は、広く他から集まる人々に対して享受されるものであって、住んでいる人間にとって大きな利益に成るかと言えば、それはよく分からない。たくさんの人々がまちにくることによって環境が悪くなるかもしれない。それにより地域のイメージが悪くなるかもしれない。実際今現在であってもそのイメージはあまりよくない。区としては、求心力、集客力を増すことで、商業活動が活発になり、財政的に豊かになるのである。もちろん関係企業についても同様である。《区が力を入れてお金も使う 渋谷駅周辺の整備・活性化 経済活動活発化 住民たちには・・・?》渋谷の人口は昼間だけでも住んでいる人口の二倍になっているのである。確かに、このことを考えるとそこに集まってくる人の利益・利点というものは区の経営にとって非常に重要である。しかしまちづくりをするならば、まずはそこに住む人達への利益の享受が重要であると考えられるのではないだろうか。

(この点に関しては若干の疑問が残るが、その疑問について深く掘り下げるのはまたの機会として、次に話を進めよう。)

確かに、渋谷駅周辺整備ガイドプランにあるように、「挑戦と創造によりあらゆる人を魅了し続けましょう」「さまざまな集積を受け止める都市の基盤を整えましょう」など、外に向かって発信する、変化あるものを受け止める、この二つによってこれまで渋谷の街が変遷し、発展し、生き残ってきたのである。このことは、渋谷という街の大きな特徴であり、

個性である。これほどまでに変化を生み出し、または取り込み、あるいは受け入れるような街があったであろうか、そうした意味ではこの点は今もこれからもよい意味で大切にしていきたい性格であるし、まちづくりもこの性格に沿って行われることになるだろう。しかしながら今後「定住できるまちとしての渋谷区の創造」を目指すまちづくりとの調和を図っていくに当たっては(今いる住民との調和を図っていくに当たっては)、そうした二つの視点、「外に向かって発信する」「変化のあるものを受け止める」というものだけでは成すことが出来ないではないかと思う。(この場合の定住には職住近接の「住」のことだけではなく、本町・笹塚、初台・西原・上原地区などのこれまでであった住宅区域やもちろん繁華街近くに住民たちのことも含める)つまり変革路線だけでは、そこに定住する人を生み出せない、住民は自分達が住む街に対して愛着を持ち、共に協力してまちをよい方向に持っていくことは出来ないのである。

第二節 連続性 (歴史的視点)

前記では、渋谷のまちづくりの一つの視点として「外への発信」「変化」というものを上げた。この節ではそれとは違ったまちづくりの視点について触れたいと思う。即ち「街の歴史」という面から見るということである。ここで一つ、「まちづくり」以前に「まち」というものが含んでいる要素というのは、人の営みそのもの、活動そのもの、あるいは人の作り出した様々なコンセプトからつくられた構造物そのものであり、その項目は多岐に渡っている。人の数だけ個性や性格があるのと同じように、それらすべてが「まち」というものの要素であり、その要素によってつくられてのが「まち」である。その具体的な項目を文献(「まちづくりの実践 田村明 著」)から引っ張ってきて紹介したいと思う。

地域価値の要素

- (1) 気象(流氷、雪、霧、霞、雨、爽やかな風、厳しい寒さ、空気のおいしさ、青い空、巻雲、翳雲、朝日、夕日、夕焼け、満月、三日月、星空、天の川、流星、蜃気楼など)
- (2) 自然(海原、入江、絶壁、磯、浜辺、砂丘、島、岬、火山、温泉、溶岩、特色ある山、見晴らしのよい丘、峠、大河、川原、溪流、滝、せせらぎ、湖、沼、大木、ぶなの森、苔むす岩、洞窟、湿原と植生、花の群落、鶴、白鳥、かるがもなど)
- (3) 人文的自然風景(棚田、菜の花畑、れんげ畑、ひまわり畑、果樹園、竹林、杉林、檜林、茅葺き、水車、水路、土橋、生け垣、沿道の花、花園、庭園、枯山水、雪囲い、雪吊り、牧場、漁港、網干し場、魚市場、猫、飼犬、飼象、馬、牛など)
- (4) 構造物(家並み、白壁、蔵、迷路、特色ある建築物、寺院、神社、教会、宮殿、劇場、ホテル、美術館、博物館、城塞、塔、煙突、記念碑、赤煉瓦、石橋、釣

り橋、鉄橋、橋梁、広場、公園、運動公園、緑地、カスケード、水辺、石畳、美しい並木道、楽しい歩道、アーケード、港、灯台、掘割、運河、魚釣場、テーマパーク、登り窯、温泉、遺跡など)

- (5) ストリート・ファニチャーと移動物(美しい広告塔、ショーウィンドー、ベンチ、街路灯、彫刻、壁画、時計、屋台、標識、自動車、電車、新交通、人力車、駕籠、馬車、漁船、大漁旗、幡、旗、ヨット、観光船、観覧車、窓辺の花など)
- (6) イベント(祭り、博覧会、見本市、スポーツ大会、会議、日曜日、灯籠流し、花火、音楽祭、人形劇、演劇、歌謡祭、彫刻展、国際コンペ、カーニバル、行進、縁日、踊り、民謡など)
- (7) 景観(自然と人工物の全体を統合したもの、色、音、光、香りを加えたもの)
- (8) 雰囲気(風格、清潔さ、賑わい、活気、不思議さ、驚き、落ち着き、静けさ、安らぎ、方言、感動、人の温かさ、もてなし、親切など)
- (9) 人間(服装、帽子、化粧、歩き方、カップル、大道芸人、一芸ある人、人材、国際人、他人の受け入れ可能な人、ガイド、笑顔、ホスピタリティ、子どものキラキラした目など)
- (10) 飲食物(酒、地ビール、そば焼酎、ワイン、ミネラルウォーター、果汁、郷土料理、名物料理、石臼そば、味噌、豆腐、菓子、果物、チーズ、ソーセージなど)
- (11) 特産品・地域産業(和紙、水引き、凧、木蠟、家具、将棋の駒、基盤、独楽、竹細工、藁細工、農産物、織物、硝子製品、石製品、陶器、磁器、鋳物、洋食器、さまざまな工業製品など)
- (12) 物語・事件(史跡、宿場、歴史的イベント、小説ドラマの舞台、創作の場、作家の住まい、溶岩流など大災害の跡、鉱山跡、伝説、おとぎ話など)
- (13) 独自の文化(コミュニティ、ゴミ回収、リサイクル、住民参加、NPO、市民活動、生涯学習、自治体行政運営、バリアフリー、健康維持、福祉、高齢者施策など)

上記のように多岐に渡っている項目から、この街にとっては、~いうものと~いうものが重要なものであると考え、それらを地域の財産と位置付け、まちをつくるというのが、個性を持ち、地域の特色を打ち出したまちづくりということにつながるのである。

次に、そうした中で何故「街の歴史」という面から見る必要があるのか、について述べていきたい。

基本的には、まちづくりにおいて歴史というものは、欠くことのできない要素であるという見方に強く共感するからである。加えて以下「まちづくりの発想」 田村明著からの引用をする。P145~147 地域個性確立の思想 個性づくり

『「まちづくり」は、自分の地域を見直し、そこから地域の特性を引き出し、これを広い

未来的視野に立って伸ばし育てることである。』

『日本列島は、38万平方キロメートル満たない島国だが南北に四〇〇〇キロメートルも伸びた長い国である。それに太平洋側と日本海側とは特徴的な気象条件の相違もある。狭いながらかなり高い山があり、海岸線は複雑で美しい景観をつくり、地区を別ける。列島各地にはそれぞれの個性があり、そこに歴史があり、多くの固有な地方文化を育ててきた。それが近代化の波で、ブルドーザーをかけたように平坦化し、個性を失った。「まちづくり」とは、個性の復興を求める運動である。』

『地域性は、地域本来のものを発見し、将来へ向かって生かせるものを評価し伸張させることである。それにはまず、地域の歴史と風土をじっくり見なおすことである。地域に伝わる祭りや伝統芸能、あるいは特産品や食べ物も、生かし方によっては地域の魅力になる。』ここで言いたいことは、それぞれの地域には、気象条件や地形といった違いが根本的にあり、それにより固有の文化や歴史が左右され、また育てられてきた、ということである。故に街の歴史という面から、地域を見ることによって、それぞれの地域の財産や育てられてきた地域性というものがはっきりと見えて来ると思うのである。育てられてきた地域性を発見し、評価し、伸長することが、まちづくりであるということである。

第三節 創造性と連続性

第一節ではまちづくりにおける創造性という視点、「外への発信」「変化」というものがあることを話してきた。第二節では連続性という視点「歴史」(風土 歴史 地域性)というものがあることを話してきた。この第三節では、両者の位置関係について話をしていきたい。第二節で書いてきたように、街を歴史的な面から見るとというのが、まちづくりの中では欠くことのできないものであると思う。しかし、欠くことのできない要素であったとしても、そこから発見されたものを常に中心としてただ守っていくのではまちづくりとは言えない。それこそまちの魅力というものが失われかねない。というのも歴史として刻まれてきたまちの一部分も、最初は「新たな創造」であったにちがいないからである。

まちづくりの発想 田村明著 P154~155 伝統と創造より『新しく創るときは、従来の伝統との調和が問題になる。通常は、伝統を引き継いでいく連続性のある創造的行為がのぞましい。ヨーロッパの美しい街並みは、そうしてできてきた。日本の古い街並みもそうである。創造性を強調するよりも、伝統性を優先してきたともいえる。しかし、常に伝統の上に立った創造性だけで良いとは限らない。場合によっては、多少の危険もあるが、今までと違った飛躍的な創造性に意味があることもある。パリのポンピドー・センターの異様な姿は、多くの議論をよびながら、パリに新しい空間をつくりだした。よく知られるように、一八八九年にエッフェル塔を建てたときには、非難ごうごうで、数年後には取毀すことになっていたが、その後新しい創造的な美しさが評価され、現在ではパリのシンボルとして欠かせないものになった。伝統と創造とが時により場合により、緊張関係を保ち

ながら「まち」はつくられる。』とあるように、「伝統を引き継いでいく連続性のある創造的行為」と「今までと違った飛躍的な創造性」の両者がまちづくりには必要であり、その二つが「緊張関係を保ちながら「まち」はつくられる」のである。更に自身の解釈でこれを言い換えると、「常に変化するもの」と「そこにあり変わらないもの」の二つがあって、まちづくりである、ということになる。

これまで、街を歴史という面から見ることはまちづくりの要素として欠かせないものであるということ、まちづくりは歴史に根ざして行われることを基本とし、同時に時には飛躍的な変化が必要であるということを書いてきた。後者については、第一章第一節でも書かれているように、区の方針として行っていくものであるので、その部分は区に任せておくことにして、自身は第二節で提案し触れた様に、自分の足元、住んでいる地域の歴史を見直し、地域の財産を発見し評価していくこととしたい。更にはそれが渋谷の新たな一面や特徴の発見となるように考えていきたい。

上記補足、現実的に考えて、まず一つ渋谷という街のまちづくりの主眼は「常に変化し、多様な価値観を認めること、受け入れ、それを街の一部として発展すること」にある。この論文はあくまでその主眼を認めつつ、歴史という要素を補っていくことにある。「まちづくり」と一言にいても、そのやり方、アプローチの仕方は様々あり、例えば伝統、歴史的要素を背景として持ち、そこに住む人々がその価値を認め、また構造物としてその歴史をまちのなかに包括している場合には、それを主眼としてまちづくりを進めていく手法が一つにとられていくだろう。

例えば、長野県の妻籠というところは、昔は中山道の街道筋のまちであったが、開発から外れてまち自体放置されていた。しかしこの古い街道の姿や残された昔の街並みに価値を見出し、保存・再生が行われ、まさに地域の特色を生かしたまちづくりが行われた。現在は、文化財保護法の伝統的構造物保全地区に指定されている。

しかしながら妻籠のように、そうしたものに主眼を置いてまちづくりを薦めていく手法は渋谷の場合無理があるといえる。なぜならそうした歴史的要素が今も強く残っているまちというわけではなく、構造物や伝統といったものが、この地に残っているわけではないからである。このことに関しては皆さんの渋谷に対するイメージと合致するのではないだろうか。そしてまたその通りなのである。故にまちづくりそのものに対して歴史的要素を、こんなものやあんなものもありますよ！！と提案していくということではなく、まちの持つ歴史を発見、あるいは再確認し、このまちの時間軸を確認していくことにする。これは先にも書いたとおり、まちづくり、まち、における歴史的視点というものの重要性を認識しているが故に行うことである。故にまたこれは、決して歴史的要素が具体的にまちづくりに反映されなかったとしてもどのようなまちづくり、まちにおいても共通して成さなくてはならないことである。つまりひいてはこのことが、大まかにいえば住んでいる人にとっては地域に対してその価値を見出し愛着を持つこと、外からこのまちに集まってくる人にとっては、新たな側面、魅力を発見することになり、まちづくりをよい方向に牽引して

いく実行者としてのエネルギーになっていくのである。またこのことはまちづくりを鳥瞰図的視点に立って見たときにはとても重要な項目となるのである。(なればよいなと思っているのである。)

ここで自分達の先人から受け継いだ財産を生かしたまちづくりをしている(しようとしている)例を上げてみたいと思う。事例は中国地方の岡山県岡山市である。ここでは、自分たちの地域の財産は固有の自然と調和した風景であると位置づけ、景観保存の条例を整備しながら新たな景観ポイントの創出を目指している。都市景観の方針という文章を岡山市の都市計画課がHPに出しているの、それを紹介したい。「私たちの住むまちの景観は、歴史や風土、そこに暮らす人々の営み、昔からの風景や文化、新しい建造物など様々な要素が融合して形成されます。岡山市も、固有の素晴らしい特徴ある景観を成していますが、自然と調和した美しい景観は、心が落ち着き、居心地のいい風景・空間となり、また再び訪れたい、また住み続けたい快適な空間となり、都市の魅力となっていきます。その都市の景観は、私たちの共有の財産であり、文化資産でもあります。愛着と誇りを持って守り、育て、創り上げていく必要があります。」

岡山市における景観づくりの基本的な考え方より「岡山市においては、固有の自然・風土や、長い時間をかけて積み上げられてきた人々の営みによって、数多くのすばらしい景観＝「原風景」が形成され、受け継がれてきました。21世紀という新しい時代を迎え、地方分権の推進、個性のある地域づくりが求められる中で、これまで創りあげられた「原風景」に磨きをかけ、新たな時代に対応した魅力ある「原風景」を創造し、未来に引き継いでいくことは、今の時代を生きる岡山市民一人一人に課せられた役割であると言えます。」という様に、冒頭でも述べたように、地域の財産を「景観＝原風景」であると位置付け、個性ある地域づくりには、それは欠かせない要素であることを打ち出している。

また「はじめに」で述べたことともリンクするが、これまでの景観に関する時代背景について述べてある箇所が「都市景観の方針 都市景観の特徴と課題」という所にあるので、こちらも参考までに紹介する。「戦前は、農村集落や歴史的街並みで見られるように都市政策や建築政策さらにデザイナーやプランナーもいないときに、個々の主体がそれぞれの必要に応じて異なった時に建物を建てながら、建築様式などに一定の秩序を持った良好な街並みが形作られてきた。それは現在に受け継がれ、暮らしに溶け込む生きた景観として高い評価を得ている。しかし、豊かな経済力の下で戦後55年かけて作り出した市街地は都市基盤施設が整い確かに機能的ではあるが、新たに生み出された美しく品格のある都市景観は数少ない。それは、都市を産業優先の場として構想し生活者の視点が欠けていたこと及び市民が連帯して街を創るという協働構造が失われたことの表れである。ヨーロッパには「神が農村を創り、人間が都市を創った」という諺があるように、都市は人間が築く文化そのものであり、都市の美しさは生活の快適性を左右する重要な要素である。市民が経済的価値を超えた生活の豊かさを享受し得る「住みよいまち・住みたいまち」を実現するためには、岡山固有の地形、風土、歴史、文化に根ざした優しく美しい都市景観の形成

が欠かせない。岡山市では、「岡山の原風景」として五つをあげている。

緑の原風景

周辺4山（操山、半田山、京山、矢坂山）近郊5山（芥子山、龍ノ口山、金山、吉備の中山、金甲山・貝殻山）と呼ばれる市街地を取り囲む斜面緑地がある。それは市街地全域から見渡せ、自然の存在を身近に感じることができるシンボル景観となっている。

水の原風景

大小様々の河川や農業用水路は、地域に潤いと恵みを与える自然資源であり、過去の営みを今に伝える歴史資源でもある。

農の原風景

広大な農地を有する全国有数の農業都市であり、自然と暮らしが一体化したエコロジカルな農村景観が広く分布しており、第二の自然景観である。農地、山林、水辺、集落が一体となって、山辺集落、水辺集落、散居集落などふるさと景観とも呼ばれる人間性あふれる優しい農村風景が豊富に存在し維持されている。

歴史の原風景

往事を偲ぶ歴史的な資源が街並み、建築物、遺跡など様々な形で数多く残され、暮らしにとけ込む地域景観として受け継がれている。足守地区の陣屋町、庭瀬・撫川地区の鴨方往来、西大寺地区の門前町など、現代に息づく奥行きのある地域景観が形成されている。古代吉備の時代からの古墳、寺社、城址など多くの遺跡や歴史的遺産も広く分布している。

都の原風景

都心部では、岡山城、後樂園という岡山の顔ともいべき地域資源があり、周囲の豊かな緑や旭川の水の流れと共に、落ち着きと風格に満ちた自然・文化景観を形成している。

というようにまちづくり(ここでは景観だが)をする上での財産・要素が五つの原風景として位置付けられる。「風景」であることを発見し、それを生かすまちづくりを行おうとしている。次からの項目では、まちの歴史という面を見ることから上記の例のように渋谷の「地域の財産」と呼べるものを発見していきたい。(既に財産・特徴として上がっている「外への発信」「変化」という要素は除いて。)

第二章 渋谷地域の歴史 (特に後半部は図の地図を参照してもらいたい。)

筆者の住んでいる地域ということで、これまで渋谷区という括りで話をしてきたが、ここからはもう少し地域を限定していきたいと思う。少し説明をすると、「自分の住んでいる地域」と認識できるのは、そう広くはないと思うからである。そう広くはないというのは、自分の街である、自分の地元である、といえるのはせいぜい駅二つ分ぐらいの範囲ではないだろうか、読者の方々も自身の地元を思い浮かべてもらえば分かると思う。駅二つでもまだ広いかもしれない。例えば渋谷区で言うなら、筆者の住んでいる地域は、渋谷駅と恵比寿駅の間ぐらいの地域である。しかし同じ渋谷区でも、笹塚や幡ヶ谷といった地域は渋谷区の端と端に位置していて到底地元とは言いにくい。というわけで地域を限定したい

と思ったわけである。とはいうものの、歴史的資料というものは、必ずしも都合よく自分の知りたい地域だけに焦点を当てて残っているわけではない。その当たりもどうか理解していただきたい。

第一節 近世までの歴史とその背景

原始の渋谷

(歴史的事実関係については「東京史跡ガイド 渋谷区史跡散歩」著者佐藤昇 1992年をもとに作成した。)

渋谷の先土器文化、縄文時代より以前というから、今から遠い昔、地球が暖かかったり寒かかったりを繰り返していた氷河期、九州が朝鮮半島とつながっていたりした時代、大陸の寒さに耐えられなくなった象たちは、日本に続々と渡ってきた。それを追って人々も日本に渡ってきた。というのは歴史の授業でもよく聞く話。やがて地球全体が暖かくなり、氷が解けて海面が上昇し朝鮮半島と日本が離れてしまった。この日本に取り残された象は人に追いかけて狩りの対象となった。ナウマン象と人間との戦いはこの渋谷でも例外ではないらしい。原宿の神宮橋の下約20メートルの上部の地層からナウマン象の一頭分の化石が発見されている(この象は偶然にこの渋谷までやってきたのかもしれないが)。若者の町として賑わう原宿で明治神宮と若者文化とナウマン象が時代を超えてつながっているのである。それから時代が経って今から二万年ほど前に「配礫」と呼ばれる遺構が見ついている。焼けた川原石があるのだが、この辺りに誰かが持ち込んで何かを焼いて食べたのだろう。今から5~6000年前になると、氷河期とは逆に氷が解けて海水量が増えて東京の低地には海水が侵入してきた。その時代の海岸線の位置は現在の標高20~25メートルであったとすると、恵比寿駅と渋谷駅は完全に水没することになる。つまり今筆者の住んでいるあたりは海の中だったのである(図 参照)。地球規模で考えてみると、その前の時代はナウマン象と格闘していたのに、それから後には海の中である。何千年単位で進行している歴史のポイントを取り上げてこんなことというのは無理があるだろうが、今の時代にしてみたら、温暖化で、日本が沈没してしまいますよ、というのと同じことのような気がして、なんとも信じられない。とにかく、渋谷区という単位で見るとこの時期は(縄文時代)それまで台地だったところが海岸線の移動で半島となった。渋谷区は、複雑な入り江をもつ海岸の地域であったのである。その台地の斜面には水が湧くポイントが多くあったこともあって、温暖な気候の海岸近くには、水を求めて多くの人や動物が集まってきたと思われる。台地は常緑樹の林になっていたらしく緑も多かった。

縄文期の人々の生活を知る手がかりとなるものといえば、土器がある。縄文早期に属するものでは、区のほぼ中央に位置する代々木八幡神社境内から破片が出土している。量としては少ない。中期前半では代々木八幡神社境内、猿楽町、鶯谷町(代官山近く)などの台地から発見され分布地域は前期より広がっている。中期後半は更に増えて、区内全域から発見されている。後期前半は代々木八幡神社境内、明治神宮、猿楽町、桜丘町などから発

見されている。しかし後期後半の土器となると、標高 30 メートルほどの恵比寿二丁目の台地に分布しているぐらいである(渋谷区の南端)。縄文期の生活の分布は、現在に近くなるほどその領域を広げているが、後期になると、その領域に変化が見られるということである。これは、縄文時代に海岸線が地球全体の温暖化の流れを受けて、陸地を浸食してきたことと、それが徐々にまた後退をして海岸線が移動したことによるものである。海岸線の移動にあわせて、縄文人も移動してきたのである。これは、海岸近くで生活することによって、豊富な海の幸、山の幸の両方を得ることができ、余剰分を山間部で生活する人々との交易に使うことができるからである。加えて、この湧き水が出る場所というのが標高 25 メートル前後であり、遺跡は標高 30 メートルの台地に中期は集中している。逆に標高 40 メートル以上の台地には遺跡は見られない。これは水がすぐに得ることができるためと考えられる。

ここで思うのは江戸前の海の幸を富士のふもとで食べる美食家縄文人という光景の想像であるが、多少無理があるだろうか。

この時代の遺構として区内には代々木八幡神社の住居跡がある。昭和 25 年に発掘が行われ、発見された。深さ 40~50 センチメートルの柱穴が 22 個も発見され、炉跡、周濠なども発見された。22 個というのはすべてが一度にあげられたのではなく、数回にわたって拡張されたことを意味する。昭和 26 年にはこの住居跡を基にして、その上に縄文時代の家屋を再現する試みが行われた。現在も二回目の再現住居が立てられている。同地には展示館もあり出土品の展示や家屋内部の再現がされている。

実際に行ってみた

縄文時代の遺跡 代々木八幡神社境内住居跡

渋谷の駅から原宿方面、NHK のある方向に歩いていく、途中急とはいわないが、のぼり甲斐のある坂を代々木公園まで歩いていく。代々木公園の中を歩いて小田急線の代々木八幡の駅がある辺りで外に出る。公園の出口まではこれまで一生懸命上ってきたのに、今度は逆にくだらないといけない。代々木八幡に行くにはまた坂を上って降りていかなければならない。

坂ばかりの地形であることを、身をもって再確認した。加えて、こうして今も我々の足腰を鍛えてくれるこの谷地形は縄文期の海岸線の変化によって形作られてきたことを考えると、縄文時代の住居跡が谷底ではなく、高台、丘から発見されたことは非常に納得ができる。

代々木八幡宮の入り口まで来ると、木々が生い茂る境内から感じられる雰囲気というのは、入るのもためられるほどに荘厳なものであった。そして一步境内に足を踏み入れると、鳥の鳴く声と木々の揺れる音しか聞こえないほど、ここの目の前に大きな道路が走っていることを忘れてしまうほど、静かな雑音の聞こえない空間である。少し階段を上ると左手にフェンスで囲まれた場所が見えてくる。フェンス内には再現された住居跡がある。思っていたよりもおおきなものであった。中に入れば生活空間はそれほど大きくないのか

もしれないが、その外観は堂々としていた。しばらくはじっと住居を見つめたままだったが、太陽の光も遮るほどのたくさんの木々がこの空間を包み込む中、本当に昔に戻ってしまったかのような錯覚にさえ陥ってしまった。歴史の教科書に載っているようなカラーの明るい縄文時代の挿絵の雰囲気とはおよそ違ったものを感じた。静けさというものと薄暗さというものが、その時代の「寂しさ」を表現しているように思われ、絵ではわからない時代の厳しさというものまで感じる事ができた。ここでのポイントは縄文時代につくられた谷地形が、今も変わらずそこに存在しているということである。

弥生時代

(歴史的事実関係については「渋谷区の歴史」 東京にふるさとを作る会編 名著出版 1978年 をもとに作成した。)

弥生時代というのは、大方の見方をすれば、米作りが始まって、生活の糧が安定し始めた時代であるというのが一般的であろう。しかし歴史というものの変化が今のように急というわけではなく、ゆっくりであったこと、全国统一の生活様式があったわけではないことを考えると、必ずしも一般論通りの時代運びとはならないのである。加えていうなら米作りというのも、この時代にどこでもできたほど技術があったわけではないのである。故に縄文時代と呼ばれる時代から米作りが行われてきた地域と弥生時代と呼ばれる時代になっても環境条件から、縄文時代と同じように生活していたちいき、その中間の地域もあったのである。渋谷地域は、縄文期の海岸線の変化によって台地は削られ凹凸の地形が作られた。そのため、川と台地の高低差が大きくなった。水が湧き出る高さが標高 25メートル前後ということも考えると、稲作に適した場所というのも限られてくる。実際に弥生期の遺跡は三箇所しか区内に見られない。これは縄文期の 30 箇所に比べると激減していることが分かる。その三ヶ所は渋谷区中南部に位置し、弥生期の土器が出土した。そのうち猿楽町(東急代官山駅付近)では、土器から稲の籾の痕跡が発見され、この地で米作りが行われていたことが明らかになった。そして更に弥生期と他の時期も交えた重なった住居跡が発見された。弥生期にしては珍しく大きな遺跡で、普通直径 4~5m であるところを長径 8.5メートル短径 6メートルもある楕円形をしている。これによりこの場所が長い間何らかの形で住居としてか集会所としてか分からないが、重要視され続けていたことが分かる。また更には、米作りによる定住がなされ、この辺りに居を構えていたという証拠にも成りえるだろう。それにしても縄文期には、海の幸だ山の幸だと言ってなかなか豊かで多くの人口を養えるだけのものがあって、それを求めて人々が集まってきたのに、おそらく弥生期は米の栽培ができる場所を探して渋谷の地を後にしたのであろう。米の栽培ができる地域が限られている渋谷ではそれが伝わったときもみな半信半疑であっただろう。今までのやり方で生活できているのだから、わざわざそんなことすることはない、という意見や冬場の保存食がどうしても必要だ、という意見がぶつかっていたかもしれない。そのうちに交易をしに他の土地へ行くとみんな米を栽培し、自分たちが遅れをとっていることに気づき、やろうと決心する。がしかし場所が無い。ではどこか土地を探しに旅に出ようという流れ

があったのかもしれない。そんなこんなで弥生期はこの土地がはじめて「過疎」という状態になった時期なのかもしれない。「生活の安定を求めてこの土地から出て行きました。」この言葉だけ聞くと、今でもありそうな状況で共通することなのかもしれない。

実際に行ってみた

弥生時代の遺跡 猿楽古代住居跡公園

渋谷駅から東急の代官山駅に向かう直線コースには、これまた急な坂がある。ちょうどJRの山手線渋谷駅から恵比寿駅に向かう線路の右手側は小高い丘になっている。この道をこの公園まで行こうとすると坂を上がっており、またあがったぐらいの場所にある。代官山駅のほど近く、今は代官山アドレスと呼ばれるこのあたりでは珍しい高層住宅を中心とした街並みのおしゃれな場所の一角に、この公園はあるのである。実を言うとこの公園、幼稚園に通っている頃から、遊んでいた場所であったが、まったくといってよいほど住居跡に関心を示したことは無かった。久しぶりに来てみたが、思ったより大きな跡であるというのが最初の印象である。人が住んでいたことを考えると、なかなか十分な広さがある。ここには代々木八幡のように再現された住居があるわけではないが、(昔はあったが、火事で消失して以来そのままである)横にちょっとした展示ケースがありこの辺りの昔の地形や農具などが再現されていて、想像力をかきたててくれる。実際にここにありましたが、というだけではなく、ここに来るまでの地形、時代背景を考えてみたとき、ここに住居があったという必然性にぶつかる。そうすることで遠い昔の出来事が、ぐっと身近になる。余談だが、ここにきたのが薄暗い夕方ぐらいの時間だったのだが、この高台、建物がまわりになかったならば、夕日がとてもきれいに見えるだろう場所であることが分かったのである。昔は夕日なんてものはいくらでもみえたであろうが、この都会でははっきりそれが沈んでいくところを見るのは難しいのである。空は狭く、先まで見通しのきかない空間で長く暮らしていると高台から夕日が地平線や水平線に沈みこむというのをずっと見ていられるという構図はずいぶん贅沢なのである。この公園で住居跡を眺めていたときに、若い男の人が住居跡の淵に腰掛けて、カップラーメンを食べているのをみかけた。昔の時代の人間もこの住居のまわりで食事をしたのだろうか。今は見られない沈む夕日を見ながら食事をしていただろうか、今は見た目寂しい公園であるが、そうした昔の視点に立って、改めてみると、違った見方、映像が見えて楽しい。地形、暮らしぶり、雰囲気など、色々な要素を盛り込んで、昔の生活や場所の情景を想像してみるとというのが、歴史を見る視点として大切であるということが、この場所にくることで分かった。ここでのポイントは、縄文時代に形作られた凸凹の地形という条件によって渋谷は米作りに向かない、向く場所が少ないということである。

古墳時代

(歴史的事実関係については「渋谷区の歴史」 著者 林陸朗 佐藤昇 櫻井勇 編集者 東京にふるさとを作る会 発行者 中村安孝 発行所 名著出版 昭和53年9月30日発行、及び、渋谷区教育委員会作成の史跡案内板をもとに作成した。)

弥生時代以後も農耕をする土地に恵まれなかった渋谷地域では、人口は増加することなく細々とした生活が続いていたと思われる。そんな中、時代の流れというやつで、死者を埋葬する墓、古墳が作られる時代に突入していった。渋谷にあった墓の形式は、高塚古墳(権力者を埋葬するために作られる)、横穴古墳(庶民の墓)の二種類である。高塚古墳は頂上部に棺を埋葬したもので、渋谷の場合小型で丸いものが多く円墳と呼ばれる。終戦前には今の代々木公園にナマコ山と呼ばれる前方後円墳があったそうであるが、戦後米軍のキャンプ地になった時になくなってしまった。現在残っている所では、これまた猿楽町のマンションヒルトップテラスの隣にある二基の円墳である。それぞれ5メートル、3メートルの高さで、6~7世紀のものであると考えられている。横穴古墳のほうはだいち上面に近い赤土の斜面に横から穴を掘り遺体を埋葬したものである。これも猿楽町とほぼ同じ地域の鶯谷町で発見されている。ただこの時代の住居跡というものは、二ヶ所しか発見されておらず、渋谷川をはさんで東の東四丁目と西の円山町といったきわめて限定された地域である。つまり米の栽培が始まって定住生活になってから、それほど人口は増えておらず、また暮らす地域というものも限定されていたことがわかる。これだけ見ると古墳時代においては、現在を見る影もなくただの田舎町であり、穏やかなものであったと思うのである。

実際に行ってみた

猿楽塚

代官山駅から程近く、ヒルサイドテラスというマンションの中に高塚古墳はある。そういえばここも高台、この場所に古墳があるというのは権力者の力を示すためのだろうか。現在はまわりを建物に囲まれ、申し訳なさそうにこじんまりと存在しているという感じだ。自分があれやこれやと眺めたり登ったり降りたりしていても、通りがかる人は誰一人として関心を示す人はおらず、ほとんどの人はここに古墳があるということさえ知らないのではないだろうかと思うほどである。何回もここを通っている自分でさえも気がつかなかったほどであるので、仕方がないといってしまうえばそれまでだが。頂上まで上るとなかなかの高さがあり、下を見ると見渡せるので(といってもビルだが)大きなものであるといえるだろう。まわりに何も無い広い高台の土地を想像し、さらにこの古墳がある場面を思い浮かべると、支配者は十分に権力を示すことができたであろう。今でこそ申し訳なさそうだが、それでもこの円墳と呼ばれる形は、まさしく人工的につくられたものであるし、古墳時代の特徴をよく表していると思う。加えて復元ではなくその時代のものがそのまま残っているということに驚きも感じた。1300~1400年ほど時間が経過しているが、中の発掘も行われずにそのままであるということ、そしてそれが現代の街の中にそのまま存在しているというところがおもしろい。階段がついているので昇ってみたが歴史的背景や、これが墓であり、今も誰かが眠っているということを考えると恐れ多くなってしまった。夜になるとまわりのビルの明かりで強制的にライトアップされている形になっているわけだが、これでは静かに眠れないのではないかと思ってしまう。墓でありながら寂しさを感じないのは、そうしたことも関係しているのであろうか。あるいはここに眠る支配者が、にぎやかな様

子を好むのであれば、これもまた良い、ということになるのだろうか。それにしても現在の墓との違いを考えてみるだけでもまさにここに古墳時代があることを実感できる。

さて、古代～古墳時代に至るまでの話をしてきたが、ここまでのポイントは、人々の生活が地形や自然によって左右されてきたことにある。海岸線の変化、日々の糧を得やすい場所、逆に米作りに適さない場所であること、権力者の墓の場所。普段何気なく歩いている場所、今となっては地形的な要因によって大きくは生活が左右されない都心において、地表に立っている建造物は変わっても、時代を経たとしても、昔との共通点を見出すことができるのである。ある意味で古墳時代以降の歴史を見るときよりも、こうした地形的なつながりのほうが、共感を得やすいとも言えるのではないだろうか。

古墳時代以降

古墳時代以降渋谷とその周辺はほとんど歴史上に登場しない。「採集」というキーワードから「生産」というキーワードが重視され、技術の伝播については中国、朝鮮半島を主として西から東へという流れがある時代、生産に対しては地形的に恵まれず日本の中においては、東の端に位置していたため(加えて古代の主要交通路からも離れていたため 図 参照「豊島」の周辺が現在の渋谷とも言われるが。)小規模な集落はあってもそれが大きな集落になることは無く、特に目立った動きも無かったのである。

やがて西国に大和政権が誕生するとこの地も段々と律令支配に組み込まれていくこととなる。何もこの地域に限ったことではないが、広い関東平野は次第に馬と布の生産地として注目されるようになった。

平安時代になると、支配を確立するために西国から役人が多くこの地に入ってくるようになった。この時代派遣された役人の多くは、出先の地で開拓を行い土地を自分のものとし、土着と領土拡大を進めていった。土地を巡る争いなども起こるようになり土着した者達は武装し、関東では坂東武者と呼ばれる武士団が形成されていった。

このように、古墳時代以降、西国からの勢力によって次第にこの土地は変わっていったのである。農業は生産する行為である。当然生産物はそのまま生きる糧、及びその余剰分は財力となる。つまり生産物を生み出す農業を行える場所、つまり土地が多くあるほど、多く所有しているほど自分の生活は豊かになり、力も大きくなる。日本中どこに行っても手付かずの場所はいくらでもある。とすれば都にいて給料体系の中で糧を得るより、新たな土地に行って自分で開拓したほうが得なのである。そうした流れでこの辺りに来た者も当然いるのである。次はそうしたこの辺りの支配者について話をしていく。

渋谷の支配者 渋谷氏

中でも一番渋谷と関係が深いのが渋谷氏である。渋谷氏は桓武天皇流れをくむ桓武平氏で、秩父党という武士団の祖である平良文から分かれ秩父氏を名乗った将常からさらに分

かれ、今の神奈川県の川崎の所領を与えられて河崎氏を名乗った基家の子、重家が渋谷氏の姓を賜ったとされている。気の遠くなるほど系図が分岐してよくわからないと思うので、ここでは渋谷氏が桓武平氏の流れで、関東に土着した武士団の一部であることが分かればほぼ満足である。渋谷氏の登場までのこの地域は乏しい生産力を向上させながら、奈良時代、平安時代のほとんどを歩んできたのである。

ここで渋谷氏、及び渋谷という名前の由来であるが、これも諸説ありはっきりしたことは分からない。しかし「渋谷郷土特報 昭和45年2月19日 国学院大学 樋口清之 教授」の説によれば、河崎基家の重家が源義家(八幡太郎義家)にしたがって京都の御所の警備に当たっていたところ御所に賊が侵入、重家は見事に賊を捕まえ堀河天皇のところまで連れて行った。名を聞くと渋谷権介盛国と賊が名乗ったので、天皇は重家に「渋谷」の姓とこの賊の相模にある所領を与えた。これを機に河崎氏は奥州征伐の功績で得ていた現在の渋谷を「谷盛庄」から「渋谷」と改称し自分も「渋谷」の姓に改名したのである。更にさかのぼって「渋谷」という名前の語源は、海水が入り込んできた谷という意味の「塩谷」から「渋谷」に変わったという説がある。話をあわせると、

塩谷

渋谷(相模国)(現在の高座渋谷か?)

渋谷権介盛国(御所に侵入した賊が地名から自分の名前にした)

それを捕まえた河崎重家に「渋谷」の姓が与えられた。

所領の武蔵国谷盛庄を「渋谷」に改称した。

渋谷(武蔵国)が誕生。 現在へ

という流れになっているのである。多くの段階を経てこの地が渋谷と呼ばれるようになったのだが、途中の侵入した賊の名前が・・・の段階については本当であるか疑わしい。ただこの地の旧名が谷盛庄(谷森とも)という名であって(区内 東福寺鐘銘による)谷や盛、起伏に富んでいる、もしくは谷や森が多い土地であったことは確かであり、不思議と渋谷の語源である谷、そして塩と関係がある海というキーワードを並べてみても、その昔海であり海岸線が引いていく中で谷が深く刻まれたことを考えれば、それもこの地で生まれたかのような印象を受けることは間違いないことであるし、それほどこの名前が遠い由来であるとは思えないということは確かなのである。もし今の「渋谷」という地名が「谷盛」であったならば、人生山あり谷あり、物事には表と裏が、そして調子がよいときも悪いときもある。そのすべてを飲み込んだまちというように例えられたりするのであろうか。それすらあながちこう解釈すれば遠い語源とは思えず、身近なものに感じることができるのではないだろうか。

さてこのあたりを治めていた渋谷氏であるが、中でも有名とされているのが、渋谷駅からすぐ近くにある金王八幡神社の名にもなった「金王丸」である。金王丸は渋谷氏の系図の中でも二度三度登場する。このことから「金王丸」というのは渋谷氏代々の幼名だった

のではないかと思われる。「金王丸」については諸説入り乱れているので、ここでは「渋谷郷土特報 昭和 45 年 渋谷の歴史物語(2)～」によるところを紹介する。河崎重家は子に恵まれなかったので夫婦はそろって八幡宮に参って祈ったそうである。すると金剛夜叉明王という神様が出てきて、子宝を授けてくれたそうである。そしてその子供に神の名をとって金王丸(渋谷重国、他弟達も)としたといわれている。この金王丸、保元・平治の乱のとき源義朝に従った。ところが結果義朝側は破れてしまう。

保元・平治の乱

崇徳上皇・藤原頼長・源義朝・平助正 VS 後白河天皇・藤原忠通・平清盛

天皇・藤原氏・源氏・平氏が二派に分かれて激突。この後源氏の力は弱まり平氏が天下の実権を握っていくことになる。

義朝はわずかな側近を従えて東国に帰国しようとするが、途中尾張国で長田忠致という者の館に寄ったところだまし討ちにあい風呂に入っているところを命奪われた。金王丸はこの知らせを受けて敵を散々に切りつけた後、都に上り義朝の妻である常盤御前にこのことを報告した。その後自分の郷土渋谷を目指すが見ると父は死んでおり、領地も兄弟が治めていたので、自分自身は剃髪して土佐坊昌俊と名を変え諸国を行脚したとされている。(金王丸は、「子宝～」のところでは重国のことを、ここでは渋谷重国の弟を指している。)

義朝亡き後、その子頼朝は伊豆での配流の暮らしの後に旗揚げ、平家に対して反旗を翻した。当初、渋谷重国は平家側についていたが後には頼朝の味方と成る、平家を追討するため義経らと行動をともしていたが、金王丸のほうは土佐坊昌俊と名を変え頼朝の命によって義経を討ちに行くこととなる。先日のNHK大河ドラマ「義経」においてもその段があり、まさしくその場面が映像化されていた。ドラマでは土佐坊昌俊が武蔵坊弁慶と知り合いであるという設定のもと描かれていたが、本当のところはわからない。とにかく昌俊は逆に義経に討たれてしまうことになるのだが、その場に臨むに当たってどのような思いであったのだろうか。義朝を守りきれなかった懺悔の気持ちがあったかもしれない。賊を捕まえたとされる祖父のように、義経らと共に平氏を打ち破った兄のようにはなれなかった自分に対して、現代風に言うのなら、何か自分も成さねばならないと思ったのかもしれない。それを考えると胸が痛い。いずれにしろこの地を治めていた渋谷氏は、源氏代々とのつながりが深く、平安末期から歴史の重要な流れに乗っていたということのなるのである。

次に渋谷地域の支配の仕方についてである。鎌倉時代に向かうに従ってこの時代、鎌倉とのつながりが重要視されるようになっていったことと、それには街道筋に館を構えたほうがよいということがあって、渋谷氏の中心拠点は神奈川県(相模国)の渋谷(高座渋谷)であり、色々な文献に出てくる「渋谷」という地名のほとんどがそれに当たる。すなわち武蔵国渋谷ではなく相模国渋谷なのである。相模に本拠を構えた渋谷氏であるが、一方で武蔵国というのも鎌倉から近く、幕府の影響のある地域であったので、次第に鎌倉道(図 参

照「渋谷」という名前がしっかりと入っている。)と呼ばれる街道が整備されるようになった。例えば区史に残るものでいうと、渋谷駅から明治通りを恵比寿方面に少し、すると左手の丘を上ったところに金王八幡宮がある。その社前から渋谷川を渡り、猿楽塚方面に抜ける道、逆は青山学院の脇から代々木八幡宮まで向かい、遠くは大宮八幡宮までつながっているという。大きくはこの道であるが、小さい小道も周辺で鎌倉道といわれている。現在の道幅と比べてみてしまうことは仕方が無く、そうするとこれが鎌倉道なのか、などとその大きさに疑問を持ってしまう。しかしそこは昔を想像してもらいたい、道などそれほど通っていなかったために、注目されなかったこの地に、鎌倉に通じる道ができたのである。これが直接発展につながるかどうかは確かに言えることではないが、これまでの、発展を阻害される要因の一つであった街道からの遠さというものは解消されたのではないか。こうしてできた道は鎌倉・室町時代に至るまで徐々に発展・整備されていくのである。この辺りの街道が発展していった一つの要因には奥州征伐も関係しているだろう。源義家然り、源頼朝然り奥州への戦には北への道が必要だったのである。「新修 渋谷区史 上巻」(昭和 41 年)によれば、源義家が奥州征伐のときに渋谷城に滞留し勢揃坂(せいぞろいざか)という新宿区との境、神宮前二丁目に軍勢を終結させ奥州へ旅立ったとされている。渋谷氏は奥州征伐の前半戦の功績でこの谷盛庄を得ているので、この旅立ちは後半戦であろうと予想できる。とするとこの地がいかに奥州への道の出発点として重要であったか、また重要性を認識していたが故に渋谷氏が本拠でもないこの地に城を築いたということがわかる。

そしてこの武蔵国渋谷で渋谷氏の拠点となっていたのが、現在金王八幡宮がある渋谷駅周辺の地域である。現在金王八幡宮は渋谷警察署の裏手にあるが、いまのそれよりも渋谷氏の拠点の範囲は大きいと思われる。金王八幡の成り立ちについてははっきりしないことが多いが、その順序としては、はじめ前九年の役のときこの地が渋谷氏に与えられ、簡単な屋敷がつくられる。そして後三年の役のあと源義家の勧請によって八幡宮が成されたということである。八幡宮は源氏の守り神を祀ったものであり、屋敷内か屋敷に付随する形で作られたと思う。その後は重家のときに八幡宮に参って一子を得、そのことにより「金王」八幡とよばれるようになり、金王丸が土佐坊昌俊と名を変え、義経に返り討ちになってしまった後に、命を下した頼朝によって再建されている(金王八幡神社社記より)。伝説では境内にある金王桜は頼朝かもしくは金王丸によって植えられたとされている。さらに頼朝より 400 年後徳川の時代に二代將軍秀忠の後継者問題が持ち上がったとき、後の家光の乳母であった春日局が後継者となれるように、この金王八幡に祈願し、更に家康のもとへ請願に行ったとされる。家光が後継者と決まった後、現在まで伝わる社殿が春日局らによって 1612 年建立された。宝庫には金王丸の遺品、毒蛇長刀や鎌倉鶴岡八幡宮の大神輿などがあり、平将門の乱を鎮めた六孫王源経基由来の品もある。源氏とのつながりを感じさせるものが多くあるのである。

実際に行ってみた

金王八幡神社（渋谷城址）

さて当時どのような館であったのだろうか。ちなみにこの時代の館は城も兼ねていたのである。といっても戦国時代後期に出てくるような石造りの城というものではなく、中世の武家屋敷に木塀や空濠といった簡素な作りであとは自然の地形を利用して敵に備えるというものであった。しかし作りは簡素でもなぜこの立地なのかというところに目を点けると城としての認識が深まるであろう。この論文でも何度も登場してきている「地形」というキーワードであるが、城に関してもそのキーワードが重要になってくる。渋谷の地は谷が多く昔海であった関係からも川の水量が多い(当時)。そんな中、敵が攻めにくく、こちらが守りやすい場所はどこであろう。そう、高台である。現在の金王八幡宮のある場所というのは、ちょうどその高台に位置しているのである。渋谷駅から考えると、渋谷警察署方面から明治通りを恵比寿方向にまっすぐ行くと、右手には渋谷川が通っていて、左手は斜面になっているのである。このあたりのビルが無ければ、八幡宮からは渋谷川方面に向かって見渡せる地形なのである(図 参照)。更に八幡宮の北は谷地形になっている。前述のとおり鎌倉街道がこの八幡宮に沿う形で渋谷川方面から北に抜けていて、交通の便もよい。更に少し渋谷氏の城としての金王八幡宮について説明していく。城は北東から南西に向けて低くなる傾斜地で、土塁を何段かまわりに築いていたとも考えられる。敵は北側が谷になっているため、南側から侵攻してくると思われる。南側にある渋谷川は、今はコンクリートで固められ、ほとんど水が流れていない川になってしまっているが、当時は水量が多く川幅も 10 メートル近くあったとされている。更に田んぼも周辺にあった関係から、渡河するにしても敵は労力を使わなければならなかったと考えられる。橋といっても鎌倉街道にかけられた橋ぐらいしかなくて、戦陣はそこからの侵入に制限されるものと考えられる。しかしそこからの鎌倉街道は急な坂道になっており、土塁からも館からも弓矢を相当に射掛けられるものと思われる。更にこの辺りは湧き水も多くあるので、長期戦もできるような作りで、居住するにも戦うにもよい場所であったことがわかる。実際に行ってみると分かるのだが、こんな都会のど真ん中に城があったという痕跡があるのかという疑わしい思いで行ってみたが、城というある種の条件によって立地が左右されるものであったためか、そこがビルばかりたくさん立っていたり、川がコンクリートで固められていたとしても、その地形や鎌倉街道、川の位置によってここが城であったということにうなずけたのである。そして確かにその時代との共通点がこの時代にあるということが分かり、身に迫ってくる思いがしたのである。

(以下歴史的事実関係については「新修 渋谷区史 上巻」昭和 41 年 発行 東京都渋谷区 をもとに作成)

さてその後しばらく渋谷氏がこの地を治めていくことになるが、時は鎌倉時代～南北朝時代～室町時代へとになっていく。足利将軍は室町幕府を開いたが、引き続き鎌倉にも鎌倉府を置き統治に当たさせた。そしてそれを補佐する役として関東管領が置かれ、代々上杉

氏の一族がこれを世襲することになった。1439年鎌倉府の足利持氏は幕府に反抗して滅亡した。その子、成氏(しげうじ)は上杉氏らによって鎌倉に迎えられたが、上杉氏と争って鎌倉を出奔、下総の古河に移り住んで古河公方と呼ばれるようになった。代わって將軍義政の弟政知が上杉氏に迎えられて伊豆の堀越に住み、堀越公方と呼ばれるようになった。このとき鎌倉は山内上杉氏の、江戸は扇谷上杉氏の勢力下にあった。またこの二つの上杉氏は水面下で争っていたがこのときの構図は、

古河公方 足利成氏 VS 堀越公方 足利政知 扇谷上杉氏(重臣 太田氏)
山内上杉氏(重臣 長尾氏)

という構図であった。その後成氏は扇谷上杉政真を討ち取ったり、山内上杉氏の片腕、長尾景春を味方に引き入れたり、これら勢力と争っていた。この件で足利成氏の味方をした長尾景春を扇谷上杉氏側の太田道灌が討ち取ってしまったこともあり、この後、山内上杉氏は計略によって江戸城を建設した太田道灌を殺してしまうこととなる。そして両勢力、両上杉氏の対立は表面化していくことになる。そしてこの対立の構図の中で新興勢力の後北条氏による関東進出が行われていくのである。まず、1504年両上杉氏が立河原というところで決戦し、扇谷上杉氏が北条氏の援軍によって大勝する。しかしその後1524年になると今度は援軍を出していた北条氏が扇谷上杉氏の領内武蔵野国に侵攻、江戸を南部から攻めた北条氏に対し上杉氏も奮戦、7・8度の戦闘を繰り返しても決着がつかず、北条氏は別働隊を渋谷方面から回して挟み撃ちにしようとした。この作戦により、ついに上杉氏は破れ、江戸は北条氏が治めるところとなったのである。このときの戦いで渋谷城とその周辺、金王八幡、東福寺、長泉寺、他ほとんどが焼かれ、渋谷は焦土と化してしまった。この戦闘は、おそらく先にも書いた城のつくりや攻め方を想像してもらえば分かるように、相当な激戦が行われたと思われる。ある意味この城の初陣であったのだろうが、北条勢の勢いの前に城としての歴史は失われてしまうこととなる。

「江戸砂子」(金王八幡の条)に「大永四年正月十三日、北条氏綱と上杉朝興高縄原にてたゝかう時、氏綱の後陣大道寺八郎兵衛、小杉をまわり、渋谷へせめ入、放火す・・・」とある。今は確かに駅前でありビルも多く立ち並ぶ地帯であり、人も多くにぎわう街である。金王八幡宮周辺で500年ほど前に戦争があつて、大火によって消失したことは今からでは想像できない。境内は都会のうるささから一時解放してくれるほど静かで落ち着く雰囲気である。日本史の中の対立の構図が自分の地域の歴史とも結びつき、そこに触れることができるというのは、大変面白い経験である。

江戸時代

渋谷氏は滅び、ここには北条氏が入り、のち豊臣秀吉によって滅ぼされ徳川家康の統治になるというのはご存知であろう。その前後、渋谷でも有名な道玄坂にまつわる名前の由来となる大和田道玄なる者が出てくる。渋谷郷土特報 江戸と渋谷の歴史(3)(前著)によると鎌倉時代、和田義盛というものが幕府に対して反乱を起こした。乱に加わったことによ

って一時的に渋谷氏も勢力が弱まることになる。敗れて後、和田氏は渋谷氏を頼ってこの渋谷で、大和田城なるものを造って住んだ。場所は今も大和田に地名が残る、渋谷城から明治通りをはさんで向かい側のどこかであると思われる。この大和田城も渋谷城が滅んだときに同じく滅んだのだが、その後一族(もしくは家臣)の大和田道玄が道玄庵という住居を今の道玄坂付近に構えたことから道玄坂の名がついたとされている。大和田道玄は、この坂あたりに出没し山賊まがいの人を襲っていたりした。代々「道玄」の名を名乗り、徳川家康が江戸城に入ってから、江戸城下の町割りについて道玄にこの地区の調査を手伝わせたことが、天正日記に記してあるそうだ。この後徳川家康によって町割りが行われていくわけだが、このことが渋谷の運命を決定付けることとなる。

ここまでのポイント　これまでの中世では、鎌倉に幕府が置かれたことによって、街道が整備され、この地が開けていくようになり、城というものも作られ支配の強化がされていった。その後全国的な戦国下克上の世になり、勢力争いの構図に巻き込まれていくこととなる。その結果鎌倉街道が通っていることによって逆に支配者とともにこの地域が焦土となってしまう、という流れであった。ここまではある意味で自然な流れであり、人工的に誰かの手によってまちの様相が変えられてしまうということにはなかった(戦陣による大火を除く建設的な意味で)。

しかしこれ以降は政治的な理由によってまちの様相はだいぶ変わっていくことになる。家康が江戸に入ったころというのは、天下は豊臣秀吉によって治まりそうではあったものの、潜在的な敵は多く存在し、江戸城も防衛対策をしなくてはならないご時世であった。

江戸への街道はいくつかあるが、そのうち甲州街道だけは直接江戸城につながる軍道であった。家康はこの街道を守らせるべく大名たちの屋敷を配置した。ちょうど甲州街道と大山街道が通る渋谷区はそれにあたり、屋敷地としてその多くが配されることになった。甲州街道には内藤氏、大山街道には青山の町名があるように青山氏が配置された。また原宿などは伊賀忍者の給地であり、甲州街道から江戸城への入口付近に居を構えた服部半蔵とも通じるところがある。豊臣から徳川政権に移るにしたがって徐々にこのあたりの武家屋敷も数が増えていった。大きなところでは彦根藩井伊家(明治神宮)、佐倉藩堀田家(日赤医療センター)、伊予西条藩松平家(青山学院)、岸和田藩岡部家(代々木競技場)、淀藩稲葉家(国連大学・こどもの城)、紀州徳川家(都立体育館)、などがある。(東京史跡ガイド　渋谷区史跡散歩　佐藤昇著　学生社　1992年より)(図参照、灰色の部分が武家屋敷を表している)

またこれとは別に土地の多くは大名ではなく幕府によって直接支配される天領となったのである。これにより年貢の負担が少ない分、特別な課役が多く課された。渋谷区の歴史(東京にふるさとを作る会編　名著出版　1978年)によると東海道や中山道、甲州街道に近かったこともあって百姓は馬を連れて街道の宿場に労役に行ったり、広尾や駒場では将軍が鷹狩を行うことから、鶉を飼いならしたりそのための草をはやししたり、また鷹を管理する鷹匠の家に、鷹のえさとして青虫やオケラを持っていかなくてはならなかったり、というこ

とだ。他にも松虫・鈴虫・蝨・生こうもり・クモ・カエル、桜の葉・桃の葉などを持っていくという課役もあったようで、時には一日中かごを持って虫を追いかけてはならなかったこともあるらしい。田畑も生産力が弱く課役も多種多様にあるこの地での百姓の暮らしは負担の大きいものであったらしい。さらに江戸時代初期～中期にかけては、江戸城下の人口もふくれあがり、それが渋谷にまで進出しだし、幕府による土地の収公(武家屋敷に割り当てられる)も続き、次第に農民たちの耕地は減少していった。こうして農業は集約的になり、茶、瓜、大根、茄子、豆、芋など多種多様な作物を育てることとなった。千駄ヶ谷などはたけのこの産地として知られるようにもなった。

また江戸まわりの農村地から江戸への食糧供給の集積地としての役割も果たすようになり、経済が発展していった。米に関しても同様で、海路で大阪から運ばれてきて日本橋あたりに荷揚げされる中で、渋谷の地は江戸周りの米が流入してくる場所になった。そんな中、米を精米する水車が多く川沿いに(特に渋谷川)設置され、それにより収入を得るものも現れた(図 参照)。

しかし江戸時代の後期になると、経済発展の様相はますます強くなり、耕地を失う農民も発生した。これらの影響で賭場や無宿人が多くはびこることになり、渋谷の地の風俗は乱れることとなった。時代はそのまま幕末に突入し 1853 年ペリーが来航すると市中の緊張は加速し浪人者や無宿人が外国人を殺傷したりする事件も頻繁におこるようになる。幕府は治安維持のために見張番所を設置し対応しようとするが、これもその建設と維持に農民に負担を強いたのであった。さらには農民を幕府の兵隊にするために銃の訓練までもおこなった。しかし幕府はほとんど戦うことなく江戸を去り新政府によるところとなったのである。そして時代は明治時代に突入していく。

先程の精米業に関連して一つ、江戸の水は悪く塩水が出たりしていたため、複数の水源から水を引いていたが、人口が増えるにしたがってそれだけでは追いつかなくなった。そこで多摩川の水を引く計画が持ち上がり、玉川上水が建設された。渋谷地域からも多くの労働力がかり出されたが、その恩賞として玉川上水の水を引くことが許されたのである。はじめは水田に水を引いてその恩恵を受けていたが、次第に水車が置かれるようになって、精米や製粉が渋谷川と並んで行われるようになった。

ここでいくつか江戸時代に関係のある史跡を紹介しよう。

穏田水車跡

渋谷駅から明治通りを原宿方面に行くと左手には宮下公園がみえる、ここで道は二つに分かれていて、右手の道は入口付近がビルに囲まれたなんともくらいところであるが、この道をまっすぐ行くと、原宿表参道にぶつかる。実はこの道、渋谷川の暗渠なのである。金王八幡の下、明治通りの向こう側に流れていた渋谷川は、渋谷駅の真下を流れ、宮下公園の下を通って流れるルートになっている。そしてここには水車が多く置かれ、米などの精米が行われていた。葛飾北斎の描いた「隠田の水車」で有名になった。

実際に行ってみた。この道は現在両側がファッション街といいますが、服のショップが立

ち並ぶとても活気のある場所になっている。昔も、一日中水車の音をさせて人が入れ替わり立ち代り賑わっていたと思うが、今は落ち着いた賑わいともいえるだろうか。ここが川であったことは言われれば納得できる。裏道にしては道幅が広すぎるからだ。しかし遊歩道として整備されているので、歩行者天国のような様相でゆとりがある。夕方にさしかかって、ちょうど道に沿って夕日が当たっていた。表参道に近いところはそれほど高いビルがあるわけではないので、ずいぶん長い間当たっていたようだが、とても暖かかった。前段で同じようなことを書いたが、この場所で夕日を浴び、目を閉じて水車の音を想像すれば、時間を超えてのどかながらも勇壮な水車の姿が浮かび、それが夕日に照らされている光景が一気に一つの映像が写真のように鮮やかに思われる。

宮益坂

道玄坂もそうだが、この宮益坂も渋谷を代表する坂の一つである。江戸時代には大山街道とつながっていて賑わっていた。道玄坂のほうはまだまだ茗荷畑(渋谷の道玄坂は当時茗荷の産地として知られていた)が多くあったときにすでに宮益坂には街道筋ということもあって、茶屋や酒店が出ていた。もともとは「宮益坂」という名称ではなくて、「富士見坂」という名称であったが、坂の途中に御嶽神社ができると、それにあやかって改称された。この坂上ってみると分かるが、結構急な坂である。この坂が「富士見坂」と呼ばれていた頃のことは今からでは想像しにくい。実際にこの坂から道玄坂方向に富士山を見られたことは確かであるが、今は並木とビルと人でその姿を確認することはできない。しかし、このあたりで富士信仰が盛んで、富士講というグループ(信仰組織と地縁組織の中間ぐらいのもの)があったほどで、定期的に富士山に登るほど信仰していたらしい。それというのもおそらくは、ここの場所から見える富士山というのが本当に素晴らしいものであったからではないだろうか。さらに途中にある御嶽神社にも足を運んでみた。ここの起源は、1570～73年の間ぐらいに、甲斐武田家の石田勸解由茂昌所有の尊像を祀った事から始まったとされている。境内にある不動尊石像は、1681年に建立され、古くから苦しみや疫病を香煙で炙り出すとされ、信仰されている。石仏には建立者の名があり、「渋谷」氏の名も見られ先の渋谷氏との関係も興味深いところであるが実際のところはわからない。それと松尾芭蕉の句碑もあって

「眼にかかる 時や殊更 さ月富士」

と富士山について詠んだものがある。これによってもこのあたりの富士の光景の素晴らしさがどれほどのものであったのかが推察できる。

区立鍋島松濤公園

道玄坂を挟んで東急文化村のむかい、夜の街道玄坂とは全く違う雰囲気のみちがそこにある。坂を挟んだだけでこれほど雑音が消えるものなのかと不思議に思うほど、静かなのである。中でもこのあたりは紀州徳川家の下屋敷があったところで、公園の大部分を占める池はこの地にふさわしく、自然な湧水によるものである。明治期には鍋島家が払い下げを受け茶畑、農場を経て公園と高級住宅街となっている。園内には水車小屋があり、このあ

たりの昔の風景や渋谷川や三田用水の水車といった風景も集約されているようである。池にはアヒルやカモも住み着いていて、センター街のカラスたちとは一線を画している。鳥も住み分けができていて、その種類の差が土地柄を表しているようではない。

東福寺

先に書いた金王八幡の隣に位置し、金王八幡の別当(神社の中に建てられた寺)であり、坂を八幡宮より少し上ったところにある。古くは渋谷氏の前の河崎氏がここに親王院を立てたのがはじまりで、頼朝の金王八幡宮修復の際に同じくこちらもされて、東福寺と称したとされている。本堂の手前には梵鐘があり(1704年)金王八幡の起こりや渋谷の歴史が刻まれている。ちょうど紅葉が盛りところで、もみじが真っ赤に色づき他に黄色や緑の葉もまじり、さながら京都のどこかの寺か庭園かと思うくらいの見事な出来映えである。金王八幡宮も静かであったが、この寺はさらに別世界である。時間がゆっくりと流れ、隣に高速道路が走っていることなどは、全く気がつかないのである。水路からチョロチョロと水の流れる音などがして雑音をかき消してくれているのかもしれないが、さらにはそれが心地よい。狭い土地に別世界を作るといえるのは日本人の美意識なのかもしれないが詳しくは知らない。しかしこのゾーンは明らかに他とは別の世界であり、心揺さぶられることは間違いない。

豊栄稲荷神社

金王八幡宮から道を挟んですぐにあるのがこの神社である。もともとは渋谷駅の南側の渋谷川のほとりにあったが、昭和36年高速道路建設によって現在の場所に移転された。渋谷川は渋谷城の自然の濠として利用されていたため、その場所にあったときは濠の外稲荷とも呼ばれていた。境内には11基の庚申塔が安置されている。これらは一つ一つ違う形をしていて、並べられてはいるものの立てられた年代(1672~1739年)もばらばらである。これは都市化によってこの地区に散在していた庚申塔が次々にこの場所に移されてきたためである。

庚申塔について これは、この地区で盛んであった庚申信仰によるものである。この地区に限ったことではないが、渋谷もその特徴がある塔が多く存在する。もとは中国の道教によるもので、昔の暦の十干と十二支の組み合わせが用いられ、その中で庚申の日は六十日ごとにやってくるが、その晩に人が熟睡すると三尸(さんし)と呼ばれる虫が体内から出てきて、天に昇って天帝にその人間の罪を報告する、それを受けて天帝は人を早死にさせたり、病気にかけたりすると言う。塔には青面金剛や三猿像(見ざる、言わざる、聞かざる)などが彫られている。この地区では江戸時代の初期から信仰が始まって、庚申の日に一晩中眠らずに夜明けを待つ「講」とよばれるグループが結成された。当番のものの家で念行や飲食、雑談などをして夜を明かした。これが地縁組織などともなり、後にはレクリエーションの場になっていった(前著 渋谷区史跡散歩より)。このような講組織は信仰からはじまったことは確かだが、それが引き継がれていって互助団体ともなっていたのである。そうした意味ではこの時代の天領として普通の農村とは違った道を歩んできた人々をまと

めあげていたものがこの講であるといってもよいと思う。宮益坂のところでは富士講を紹介したが、この「講」という組織は、何に対して集まるかということも重要であるが、暮らしを支えあう互助組織としての役割も併せ持っていたことを理解する必要がある。「何に対して集まるか」という所は大学のサークル活動のくりに似ているかもしれない。

渋谷氷川神社

金王八幡宮の外にある大きな鳥居を抜けて、細い道を道なりに行くと、氷川神社にぶつかる。かつてここ一帯の鎮守であったが、創立年代については確かなことは分かっていない。江戸時代よりずっと以前、金王八幡宮の縁起にもさかのぼるかもしれない。しかし神社の境内の土俵で江戸時代に江戸郊外三大相撲の一つである「金王相撲」が行われ、本職の力士や素人による相撲が行われ、大変な賑わいであったことは伝えられている。今もその土俵は残っており、子供相撲大会などが行われている。最近になって立派な屋根つきの土俵に生まれ変わり、大相撲の力士を呼んだりイベントが行われている。昔の土俵というのは土が盛り上がっていて、うっすら円形が見えるだけの質素なものであった。使われている形跡も全くなくなぜここに土俵があるのか不思議で仕方がなかった。今考えると、ちょうど土俵が底辺のくぼ地であり、観客が見やすくなっていたのが思い出される。土俵も新しくなり、周辺も整備されたため、これからはさかんに相撲が行われるかもしれない。もしその機会があったら行ってみようと思う。ところでこの神社、ずっと同じ場所にあつて、土俵も同じ位置にあるのだから、これこそ昔の面影を今に残すというかそのまま残っているこの地域の代表格であろう。昔からここは遊び場であつたし、境内を駆け回つた思い出が多い。夏には祭りが行われ、出店が立つ。今思えば昔から、子供の遊び、祭、相撲などは繰り返し毎年の営みとして何百年も行われてきたことなのである。自分自身が地元とつながっている意識がなく、何によって結びついているのか分からなかったが、確かに、ここに生活するものとして伝統に触れていたのである。そのことがとても不思議である。これまで自分が見てきた氷川神社は、今の氷川神社であるが、歴史について調べてから見ると、過去の氷川神社は、過去から未来への架け橋としての役割を担った氷川神社であり、その歴史の一部として自分がいることを知ることができた。余談だが、この神社、ドラマの撮影場所として頻繁に出てくるのである。しかしいつも見慣れたものであるのに、ドラマの場面を通してみると全く違った風景に見えてくる。それはそのときの状況に左右されて、そのフィルターを通してみているからそう見えるのだろう。おそらく今自身は氷川神社を見る眼はかわっているだろう、それは同様に歴史というフィルターを通して見ているからそうなるのではないか、と思うのである。

広尾水車跡（玉川の水車）

恵比寿駅から渋谷川を広尾五丁目方向に行くと臨川児童遊園地がある。ここは昔玉川家が水車を置き大規模に精米を行っていた場所である。この辺りでは八代將軍吉宗も鷹狩を行ったとされている。渋谷川に堰を作り、水を邸内に引いて水車を回した、というほどに規模を誇っていたが今は見る影もない。ただ、ここに水車があつたとすると、渋谷川沿い

の水車は広い範囲にわたって置かれていたこと、精米を商売として行うことが盛んであったことが分かる。コンクリートの川は公園と少し距離ができてしまい、川があるということすら公園からは気にならなくなってしまっている。面した道路の交通量が多いこともあってのどかとは言いにくい場所に変わってしまったこともまた確かである。

さて江戸期の史跡についていくつか書いてきたが、渋谷に数ある歴史的なものの一部分であることを理解してもらいたい。そしてまた選り出されたものの多くは、そこにある歴史的背景を中世以前からの歴史的視点から見ても理解しやすいもの、もしくは自身との結びつきが強いものである、ということも同時に認識しておいてもらいたい。

ここでのポイントは、もともと農業に向かない土地であることに加え、政治的理由によってさらに集約的な農業を行わなくてはならなかったこと、その過程で玉川上水を引いたことやもともと水量の多い川のおかげで水による営み(水車など)の恩恵に与っていたことである。

第二章 第二節 近現代のまちの面影 (明治時代以降)

武家屋敷が多くあったこの地域であるが、明治維新以後はそれらが今度は政府によって収公され、屋敷に詰めていた武士たちも国元に帰ってしまった。またその人たちに付随する商売によって生活していた人々も糧を失いこの地を去り、一時渋谷の町は人口が減り、閑散としていた。この状態を何とかするために、政府も屋敷跡地での茶栽培を奨励するようになった。当時日本の輸出の主なもの生糸とお茶であったので、時勢も手伝うところとなった。一時は「渋谷茶」「代々木茶」などと有名になり、中でも今も名前が残る松濤地区の松濤園は銘柄として世に知られるようにまでなった(図 参照)。しかしながら、それも静岡茶や宇治茶におされ、現在まで残るようなことはなかった。この後再び渋谷の地域は都市と郊外の接点という利点を生かし、農地が増え近郊農業が最盛期を迎えることとなる。これに連動する形で水車の数も増えていった。そして周辺部の生産物の精米や製粉も行うようになったが、それも長くは続かなかった。止まらない宅地化と工業化によって水が消費されるようになると、渋谷川の水量が減り、水車業は電力に取って代わられてしまった。

そこで今度は牧場経営という産業が興ってきた。これもまた都市と郊外との接点という立地を生かしたもので、新鮮な牛乳を運ぶことができるというによって利点で成立していた。一方で渋谷川周辺では工業地帯が発達していった。低湿地で地価が安かったこと、恵比寿駅の開業が明治 39 年と遅く交通の便から宅地化が遅れていたことによるものである。しかし宅地化の波に飲み込まれ工業地帯の拡大は進まず、次第に工業の中心は下町のほうへと移って行ってしまった。宅地化が進むと日用品などを扱う商店が増え始め、商業地が発展することとなる。東京市電や鉄道の開通によってターミナルとしての役割を渋谷が担うようになるとさらに商業は発達していった。

しかし戦争によってほとんどすべてのものが焼かれると、再びゼロからスタートするこ

とになった。そして戦後はあたらしいものを次々と吸収し、大きな街へと発展していく。

これが明治時代以降の流れである。明治以降の街の動向見ると第一章で書いたように、現在の渋谷のまちづくりの目指すものと連動している気がする。今のところというなら、時代に合わせて次々と産業を変化させるというあたりが、今の渋谷のまちの特徴ともつながってくるのではないだろうか。一つのものがだめになれば、次のものが出てくる、交通のターミナルであるという点はもはや普遍的であるので、人が離れていくようなことは無い、むしろ人を求めて産業が渋谷の地に向かって集まってくるのである。自分が取り上げたいのは、こうした現在のこのような流れになる前の渋谷というまちの特徴であるので、明治以降については重く扱わないこととする。しかしながら、現在と、これまで扱ってきた時代をつなぐ時間帯であることは間違いないので、どのような時代であったのか、その時代を生きた人たちの伝承を見てみることにしよう。

「ふるさと渋谷の昔がたり 第二集」昭和 63 年 渋谷区教育委員会 編

お話して下さった方	上原一丁目	吉田国太郎さん(明治 35 年生)
	渋谷二丁目	名取阿久太郎さん(明治 42 年生)
	宇田川町	鈴木四郎さん(明治 34 年生)
	宇田川町	藤田佳世さん(明治 45 年生)
	道玄坂二丁目	富田信太郎さん(明治 41 年生)
	道玄坂一丁目	並木彬守さん(大正 4 年生)
	道玄坂二丁目	安藤善啓さん(昭和 9 年生)
	道玄坂二丁目	関口 茂さん(明治 40 年生)

より。

道玄坂

「道玄坂の道幅は、二回ぐらいに拡げられています。勾配もたいそう急でしたが、坂が削られて段々と緩やかになったのです。」

「勾配がゆるやかになる以前の道は悪くて、荷馬車の通行はたいへんでした。そこで、荷車の通るのを待ちうけていて後押しする人がいました。三人も四人もおりましたが、後押ししてもらおうと銭を払いました。」

「雨が降ると、土がドロドロになって流れ、通行の度にはねかえってしかたがありませんでした。道幅が狭かったので、軍隊の車が通る時などは、ハネ(注 飛び散った泥)が家の中にまでも入ってきました。」

「明治四〇年代だと思いますが、父が道玄坂に店を出したころには、店の前がずっと田んぼだったそうです。坂道の向こう側には、二、三軒ぐらいしか商店はなかったようです。年末になると、農家の人々が車を引いてきて、その店ですしなどを買って帰ったということです。」

「大正六年に、今の国立競技場の辺にあった岡部ヶ池が決壊しました。これは、渋谷開闢(注、はじまる。本来の意味は、天地が開けはじめること)以来の大水でした。今の 109(注、道玄

坂二丁目三〇番にある)のところで二尺(注、六〇センチ強)も浸水したのです。道玄坂で二軒の家が水に落ちてしまいました。」

渋谷川

「昔の渋谷川は、堰の上流などでは、深くて背が立たない程でしたが、そこで水泳を習いました。今の宮下公園あたり(注、渋谷一丁目二十四番ないし二十六番)です。」

「渋谷川には、コイ・ナマズ・フナなどがたくさんいましたし、ウナギもとれました。夜の間にはエサをしかけておくと、翌朝にはたいていウナギが二ひきぐらい釣れていました。」

「渋谷川には水車が幾つかありました。たとえば宮益橋のすぐ近くには「三井の水車」がありました。場所は、今の東急のれん街のあたりか東急百貨店旧館の入口のあたりでした。」

「渋谷むかし口語り 区民が紡ぐ昭和」平成十五年 野村敬子 編

より。

小林幹育さん 昭和15年生まれ 渋谷一丁目

(抜粋)「明治から大正にかけては、渋谷川はまだきれいな流れで、綿を打つ水車小屋が現在の東急デパート付近にありました。水車を回すために水を貯めた堰の付近はぐっと深くなっており、父の子供の頃は「宮益橋より飛び込みをして遊んだものだ。」と、父からよく聞きましたね。またこの堰の辺りは、夕方になるとヤンマが翔んできて、子供達はみんな目を輝かせて、飛び交う銀ヤンマや鬼ヤンマを採ろうと、とりもちをつけた竹竿を振り回し、夢中で追ったりしたそうです。台風の後には増水したこの川の上流から、大きな鮎や鯉が流されてきて、堰に溜まっているので網ですくって食料にしたそうです。そして昭和になり川が汚れてきてからは、目黒川まで泳ぎに行ったそうですよ。」

並木茂七さん 大正二年生まれ 神山町

(抜粋)「私が生まれた頃の渋谷は、渋谷川が流れ水車が廻り、田圃とお茶畑が続き、檜、栗、櫟の林がある、のんびりとした田園風景と聞いています。茶畑らしく「茶の木稲荷」というお稲荷さんもあったそうです。聞くところでは三百五十年以上も前に建立された、お稲荷さんだそうです。道玄坂はまだ、農家の野菜を運ぶ荷車を押して一銭二銭と労賃を貰う人たちが集まっていたそうです。」

丸山仁蔵さん 大正二年生まれ 東二丁目

「渋谷には信州出身の豆腐屋さんがたくさん居ました。十四軒もありましたね。～(中略)～渋谷の豆腐屋の八割が信州関係者という感じでした。～(中略)～昔からなんと言っても「水」です。川が流れ、地下水が豊かですから、櫟も、桜も、しだれ桜もよく育つのです。湧水が豊富、これが渋谷の豆腐をおいしくし、それがあから豆腐屋も出来る。」

「～しかし金王相撲の記憶は鮮やかに残っています。当時の年寄りに聞いた話もまだ覚えています。渋谷は相撲がたいへん盛んでしたね。相撲に対する熱気がありました。氷川神社の土俵の他に、公会堂通りに土俵がありましてね。普段も稽古をしていました。時々、相撲部屋から力士が来て、稽古をつけていたものです。待乳山・男女川などが若い人たち

を連れて来ていました。今年四月、土俵が整備されました。横綱武蔵丸闘を迎えて、土俵開き、金王相撲を行いました。田村氷川神社宮司によって執り行われた、厳かな神事がありました。江戸時代以来の伝統を継承する歴史を感じました。」(「今年」=平成14年)「明治時代以降にも祭りの相撲は荒っぽく、氷川神社の金王相撲は中でも「喧嘩御免」の極め付きというわけです。金王相撲の人気は渋谷の「四つ車」「渋谷川」「大泉」など地元の人が強くて、他から飛び入りして来る人を負かす名人がいたからと伝えていきます。素人相撲ですが、東京では名の知られた力持ちだった。深川の「日本海」浅草の「破れ傘」麻布の「赤達磨」等いろいろ強いのが、金王相撲にやって来たようです。勝ち抜きの優勝者には米俵が渡る。お米が一番の時代。～(中略)～また渋谷に相撲の熱気が湧いてきて、楽しみにしてます。」

江戸時代ぐらいまでの歴史について調べてきたが、その時代の風景がどんな風であったかということになると、とたんに信憑性がなくなってしまう。だからこそ色々と考えられて楽しいということも事実だが、よりその時代に近づくとしたら、こうした資料がもしくは実際に話を聞くことが一番であると思う。なぜなら、その時代の一般的な動向なら、統計資料として出ているので見ればよいしそれ以上のことは何も出てこない。しかし一人の人間の証言というのは、一般的な動向の統計資料に付随した、そこから派生した枝葉のエピソードというものを持っているのだ。それは明らかに分析したものではなく、見たままのもので、後の人が知りえない貴重な視点である。

第三章 渋谷のまちづくりと地域の歴史

これまで、地域の歴史とりわけ原始から江戸時代に至るまでを中心に話を進めてきたが、ここでその渋谷の歴史に対して、強い影響を与えているもの、即ちそれはこの地域の特徴とも言えるかもしれない。それは何なのかということをもとめてみたい。ポイントポイントでまとめてきたので、重複するところもあるかもしれないが改めてということで理解してもらいたい。

弥生時代になるまで、この地域は海岸に位置したり海の中だったり、海水面の高さに影響を受けて生活圏を変えていた。結果的にこのことは入り組んだ地形を生み出し、その後の時代の人々の生活を制限することとなる。唯一この時代の遺物で財産として後の時代に受け継がれたものといえば、豊富な湧水である。補足すると海底と陸地を行ったりきたりしていた関係で、渋谷粘土層と呼ばれる独特の地層が出来、これが水を蓄えている層になったわけである。これは先の茶畑の項でも触れたが、現代にまでかわらず影響力を与えている。ちなみに余談だが、うちの家も地下の水脈から水をくみ上げていて、夏には冷たい水に触れることが出来るのである。そうしたことでもこのことは影響を受けているのが実感としてあるわけである。

弥生時代になって「稲作」「生産」ということが盛んな時代になると、この土地はそれに

向かないことが判明する。入り組んだ地形は耕作可能な土地面積を減らしてしまうからだ。このことは弥生期に入って人口がそれほど多くはなっていない、むしろ減った、ということからもわかる。これ以降の時代で、農作物の生産というところでも何かよく取れたりするということではなく農業は向かない土地であるということが時代を共通して言えるであろう。

古墳時代では支配者の権力を示すのにこの高低差のある地形はよく利用されていたようである。しかしながら現在に至るまで権力を示すものが地形の中で高台を選ぶかについては否である。高い建物を建てたいということはあるかもしれないが、地形的な要素で決めるかどうかは疑問である。

中世においては、城の立地ということでこの地形が利用された、川や斜面、谷という条件によって渋谷城があつた場所に固定されたのである。また、道についてだが、古代は開けていない交通路が原因でなかなか発展しなかったが、政治権力の近くにたまたま立地していたため交通路が整備され、まちや経済が発展することになった。もともとは入り組んでいて、高低差の激しい地形であるので交通路が発達する要素がないというのが渋谷である。しかし途中でも書いたが、各線路や幹線道路のターミナルという役割は、中世以降現在に至るまで、地形的に不利な要素をはねのけてまで担っているのであつて、これは今後も普遍的と見るのが正しい評価であろう。

江戸期には豊富な水量を利用した水車というものがこの地の重要な産業を担っていたわけだが、この豊富な水量というのも湧水地が多いことと、入り組んだ地形であることに関係している。入り組んだ地形は川に色々な場所の水を集めてくることになる、湧水地が多いことでさらにその水量が増すのである。

そこから導き出される渋谷の特徴というのは、究極的に言ってしまうと、この地域の歴史の大本は「入り組んだ高低差の激しい地形」と「豊富な湧水」の二つだけである。そして時代を経て「各線路や幹線道路のターミナル」というものが加わる形である。現在の渋谷はそのターミナル的性格によって第一に、次々に新しいものを受け入れ、第二にそれを他の地域に波及させるという構図をもっている。これにより渋谷地域は、常に新しい状態にあり、古いものは渋谷の周辺や他の地域へいくという流れが出来ている。競争による淘汰と波及によってまちの新陳代謝が行われているのである。一方でこれまでに導き出してきた「入り組んだ高低差の激しい地形」と「豊富な湧水」という二つの要素は、今のまちや自治体のまちづくりからは抜け落ちていると思うのである。そしてそこにどうしても違和感がある。だからこの三つの要素をうまく使ってまちづくりをしたほうがよいと思うのである。

(このように自分の住んでいる地域の歴史を学ぶことで、現状は何かがおかしい、と自然に思うのである。自分の住んでいる地域の根本と言うものが分かると、それがその地域特有のものであり個性であるということも分かって、自分のまちに対して愛着を持ちやすく、

または持つようになるのである。でも実際に今すんでいる地域にそのかけらが見られないと、愛着が持ちづらく、まち自体が不透明に見えてくるのである。これが必然性と現状のギャップであり、違和感を生むのである。つまりはより多くの人に、自分の住む地域の歴史について学んでほしいのである。これが、まちづくりと地域の歴史の関係と、その両者の具体的な接近の仕方の案である。)

渋谷駅周辺整備ガイドプラン21では現在の渋谷駅を重層な建物にするらしいが、地形的に言えば一番の谷のへこんだ部分にそれを埋めるような大きい建造物を建てることはこの地域の特徴である地形的な要素を見えにくくしてしまい、まちの持つ本来の姿を隠してしまうこととなる。このことによって地表面にある建造物やそこで行われている経済活動の変化というものだけに目がいくという現象が加速していくようになるだろう。勉強して注意してみないとわからないほどに、地表面から上の出来事というのは印象が強く、もはや地形的な要素というのは印象が薄いのである。まして一つのまちが入るくらい、その内部だけで生活に関する用事が事足りてしまうような建造物を作ってしまったら、地域を歩くことによって地形的な要素の最低限のものについて認識できていたのに、それも無くなり、人々の生活空間は地面からはなれ、ある意味平坦な、平面的な空間の中での生活を送ることになる。

ターミナル的な要素の整備と利便性の向上というポイントは正しい。だからこそそこに「水」という要素だけでも共存できないであろうかと考えてしまう。まるで「水」が建物にはなくてはならない血液であるかのように、大きい建物であっても水が循環できるような仕組みをつくり、先にも書いたが「水はある」、そう確かに意外と緑が残っている渋谷のまちには水を目にすることは一応ある、があるだけの段階から一つ進んで「水に触れる」という段階をつくれないだろうか。例えばショッピングモールを考えてもらいたい、モールの交差点にはベンチがあって、花壇のようなものや植え込みがあって通る人の心を癒してくれる。これが本当なら普通の街中である光景なのだろうが、ここでは出来ない。しかし出来ない分、新しく作られるものには昔なくなってしまった要素であっても、それを色濃く反映させることができる。水というものがこの建物のテーマとなれば、そしてそれが渋谷のまちには昔からあったものであるということも合わせて伝えられることが出来るようになれば、このまちの古くからある根本的な要素を現代にも反映できたことになる。

具体的に設計どうこうと言うわけではないのだが、「水の循環」、「水に触れる」という要素を反映させるには、これでもかというくらい目に触れる範囲、座って立っても歩いてても水とともにあるというほどに配置してもよいのではないだろうか。去年京都に旅行に行ったのだが、上加茂神社というところで半日ぐらい過ごした。このときほとんど観光客は居らず静かな場所であったことを覚えている。境内には庭園と水路があり、木々の中に時折ベンチがあって流れを楽しむことが出来るようになっている。目を閉じると川の流れとひんやりとした空気を肌を感じる事が出来、耳には心地よい水の流れの音を聞くことが出

来る。この水の流れる音というのは、目をつぶって聞くと自分が水の中に入ってその一部になってしまったかのような感覚に陥る。しばらくそのまましていると、眠っているのとは違うのだけれど、一種の瞑想状態に入っていく。すべてのものが洗い流されていくような気がしたのである。これは大げさなのかもしれないが、水にはこうした力があるのだということ、ここまで浸らなくても水の近くにいるだけで清々しい気持ちになるということは確かであると思う。こんな場所どうでしょうか。

あまり水とは関係なくもう一つ、新しくするついでにちょっとしたスペースをもらって、渋谷のまちの案内板(マップ)を置く傍らに昔のまちの案内板を同じ大きさで作ってしまったらどうだろうか。高さ 10 メートルぐらい、横 10 メートルぐらいあればいいだろうか。現在版も過去版も色々な部分か着脱可能になっており、現在版で取り壊された建物や場所は次々に過去版に反映させるという仕組みだ。やはり廃りがはやいという特徴を捉えた仕組みとも取れ、また競争の図であるとも捉えられる。しかし目的は当初の通り街を歴史的側面から見ることにより少しでも関心を持ってもらうことなのである。もう少しスペースをいただけるならその横に昔の渋谷ブースなんてものもつくりたい。古い歴史の博物館にはほとんどの人が行かないのであるが、こうした新しい建物の中にある歴史的な展示というのは意外と人気があって、ふらっと立ち寄った人までも入ってくるのである。人が多くいるため、見ようと思う人がいる確率が上がること、人が人を呼ぶという人だかりの原理が働くということが理由である。中世の歴史の人気がないのなら、明治～昭和の写真を中心に江戸期の風情なども織り交ぜてこのブースつくったり、季節ごとに時代を総入れ替えしたってよい。最近取り壊された建物についての特集をやってもよい。とにかく歴史との接点を持ってほしいがためのものなのである。これは住んでいる人、まちに集まってくる人の両者にとって新しい発見をさせてくれる場になり、その両者の共通認識にもなる。またその共通認識をもとにこの渋谷の新しいよりよいまちとはどんなものであるのかということを探し、つくられていくという流れをつくることなのである。(そこには当然のように歴史の反映がある)

第四章(終章) 自分の住む地域を見つめ直して おわりに・・・

ここまで書く中で、結果的に自分の住む地域を見つめ直してみるようになった。初めはこのまちの歴史というものなんてほとんど無く、昭和期に発展して現在もにぎわっている、といった程度の認識しかなかった。それもまた歴史の一部分であろう、しかしここまで歴史上から現在まで一気に通ったこの地域の要素、特徴というものが見えてくるとは思わなかった。ここで思うことは、この渋谷地域でさえこのことが出来たのだから、他の地域でも絶対に何か見つかるはずであるということである。またそれは、各地域にはそのまちが出来上がった理由というものが必ずあって、それを知ることによって地域に対しての愛着が生まれるということでもある。この文章を書くまでは、何か自分のまちの不透明さに対して釈然としないものを感じていた。いったいこのまちは何者であるのか、どこから来てどこに

行くのであるのか、まちの特徴を一言で言えるか？それを自分は実感しているのか？それに愛着を持っているのか？などと次々と思っていた。今ならその疑問に少しは答えられると思う。

また、昔の渋谷の風景について証言されている記述を見たときに、自分だってこれから何十年か経ったらそういう立場に立っていて、誰かにインタビューを受けることになるのかも知れない。そうしたらこの自分が嫌いと思っていた風景について語らなくてはならないのかと思うと気が重い。しかし今後さらに悪い状態になるかもしれない、そうしたら、昔は良かった、という語り口になると思うのだが、昔あって今もうなくなってしまったものという観点で考えてみると、五島プラネタリウムがあるだろうか、今はもう取り壊されている渋谷駅の向かいの東急文化会館の屋上にプラネタリウムがあった。池袋にもあるが、規模としては渋谷のほうが倍以上大きかった。小さいときには家族で、幼稚園で、小学校でといった具合に地元に住んである人なら一度は行ったことがあるという人気のある場所であった。天井がずっと見えているのに、急に星空に変わってしまう。これが不思議でしようがなかった。はじめに今の渋谷上空の星空を見せてののだが、星など数えるほどしか見えない、しかしその次にほんとうは渋谷上空にはこんなに星があるのですとって、満天の星空を見せてくれる。大気が汚れたり、夜でも明るかったりする関係から、数えるほどしか見えないのであるらしいが、明治のはじめごろまではこれが実際に見えていたのかなどと考えると、そこも寂しくうらやましい。しかしプラネタリウム自体は渋谷の誇るべき財産であったことは間違いない。文化会館屋上にはこのようにプラネタリウムがあるわけだが、下って一階には大きなスクリーンの映画館があった。高校時代はよく一人でも映画を見に行ったが、迫力のある映像が売りの映画はここで決めていた。今渋谷にあるスクリーンのどれよりも大きかったこの場所で印象的だったのが「パーフェクト・ストーム」という映画である。漁に出た小型船が、嵐に巻き込まれるという話だが、波が自分の体をつかまえて、飲み込んでしまうのではないかというぐらいの迫力であった。ぜひここで見たい映画が取り壊されてからも出てきたのだが、その迫力を想像するしか出来ないのは、残念である。

川にしても、自分たちが生まれてから何年かはまだコンクリートで固められていなかったことを覚えている。しかしあるとき突然工事が始まってほとんど水がながれていないコンクリートの川になってしまった。そういえば母親が、川をコンクリートで固めてしまうようなまちには住んでいたくないといったのを覚えている。何のメリットがあるのか子供心に全く理解できなかった。コンクリートで固められているが故に、自浄作用は失われ、藻を取り除くことも、においを抑えることもできなくなってしまったのである。究極の治水であるかもしれない、しかしやりすぎである。

JR 山手線恵比寿駅については今と全く違うのである。今でこそ埼京線や湘南新宿ラインが乗り入れているが、昔の恵比寿駅は幅の狭いホームがひとつあるだけ、構内も立ち食いそば屋があるだけの、なんともさびれた駅であった。降りる人も乗る人もまばらで、ホー

ムは列車側に向かって傾いていた。それが今となっては駅ビルまで持つ立派な駅である。変われば変わるもの、これが時代の流れというもののか。自分の印象では、駅ビルになってから一気に乗降客数が増えたように思う。ちょうど自分が電車で中学に通い始めた頃なので1996年あたりからであろう。開けていく段階では、地元民にとっては人がたくさんいて活気があってよいのだが、開けてしまうと、静かなまちを恋しく思うのである。今では12月になると恵比寿様の横に巨大ツリーが出現し、駅前には待ち合わせる人でごった返している。

自分が特徴的なことで覚えているのはこの程度である。そのほかは今とほとんど変わらないのである。おそらくこれからの変化に伴って今ある風景が歴史の一部として徐々に取り込まれていくのであろう。そう、変化はゆっくりで、自分の生まれたころと老人になるころのことを比べなくてはなかなか違いというものを見つけられないほどなのである。しかし確実に自分もまちの時間の流れの一部なのである、今あるまちの風景にはそうなる理由があるし、変化するにも理由がある。誰かがこの地で茶畑に囲まれて育ったといえば、自分はこの地でビルに囲まれて育ったという。どちらがよいということではなく、ともに時間の一部分であるのだ。そしてこの二つのことも歴史のどこかの流れや要素によってつながっているのである。要は何が言いたいかといえば、「まちづくり」に「歴史」の要素を反映させるにしても、現状もその歴史の延長線上にあるのであり、どちらか一色に染めなくてもよいのではないかということである。肝心なのは今でも昔でも、このまちにある根本的な要素は何であるのかについて洗い出し、まちに反映させることであるからである。この方法は、わざわざその土地と全く違うものを持ってくるまちづくりをするよりも、よっぽどじっくりくる形というものが出来うるのである。

つまり、地域の歴史を学ぶことは、歴史的まちづくりをするための、材料探し(ここに有名な寺があるとか、有名な人が治めていたとか)をするものではなく、長い歴史の中に反映されているこの地の根本的な要素を洗い出すために行うのである。そしてこれが『まちづくりにおける歴史的視点』の意味である。

参考文献

- 「渋谷区の歴史」 著者 林陸朗 佐藤昇 櫻井勇
編集者 東京にふるさとを作る会
発行者 中村安孝 発行所 名著出版 昭和 53 年 9 月 30 日発行
- 「東京史跡ガイド 渋谷区史跡散歩」
著者佐藤昇
発行所学生社 1992 年 6 月 10 日発行
- 「新修 渋谷区史 上巻」昭和 41 年 2 月 2 8 日発行
発行 東京都渋谷区
印刷 相模原印刷株式会社
製本 株式会社佐々木製本所
- 「渋谷郷土特報」発行 渋谷郷土研究会
発行編集人 加藤一郎
- 「ふるさと渋谷の昔がたり 第二集」昭和 63 年 3 月 発行
編集発行 渋谷区教育委員会
- 「渋谷むかし口語り 区民が紡ぐ昭和」平成十五年三月発行
発行 渋谷区教育委員会
編者 野村敬子
- 「まちづくりの発想」1987 年 12 月 21 日
著者 田村明
発行者 緑川亨
発行所 株式会社 岩波書店
- 「まちづくりの実践」1999 年 5 月 20 日
著者 田村明
発行所 株式会社 岩波書店
- 「散策マップしづや」平成 7 年 3 月発行
発行 東京都渋谷区役所
編集 企画部広報課
- 「渋谷の坂」昭和 60 年 11 月 1 日発行
発行 東京都渋谷区教育委員会
編集 東京都渋谷区立白根記念郷土文化館
- 「わたしたちの渋谷」初版発行昭和 52 年 3 月 31 日
編集 「わたしたちの渋谷」編集委員会
発行 東京都渋谷区教育委員会

図の ~ はこれより作成

参照ホームページ

<http://www.chizumaru.com/index.aspx> 地図丸トップページ 図 はこれより作成

<http://www.city.okayama.okayama.jp/toshi/tokei/index.htm>

岡山市都市整備局 都市計画部 都市計画課ホームページ